

「TFU 教育フォーラム 2021」 記録集

2021 年 12 月 4 日（土）
（オンライン開催）

主催：東北福祉大学教育学部/東北福祉大学大学院教育学研究科
後援：宮城県教育委員会/仙台市教育委員会/河北新報社



「TFU 教育フォーラム 2021」発刊にあたって

東北福祉大学 教育学部

学部長 寺下 明

2021 年 12 月 4 日に東北福祉大学で開催された「TFU 教育フォーラム 2021」には、多くの皆様にご参加いただき、心より御礼申し上げます。コロナ禍の中、オンラインではありましたが、教育フォーラムが 2 年ぶりに開かれたことを大変嬉しく思います。

私立大学は、建学の精神が存立の基盤となっております。全国で 600 近い私立大学がありますが、私は、本学の「行学一如」という建学の精神が一番素晴らしいと思っています。「行学一如」は、なかなか奥が深く難しい言葉ですが、理論と実践との往還や円環、あるいは融合というふうに言われます。また、らせん状に深まっていく絵で説明されることもあります。

最近、人が上ってくるらせん階段を上から見の機会がありました。上から見ると、人がぐるっと同じところを回って元に戻っているように見えるのです。しかし、横からみるとかならず 1 段上っている。学生の頃習った、西洋哲学の弁証法的発展のことを思い出しました。

寺子屋があった時代、子どもは、それぞれの実情やその興味・能力に合わせて、学ぶことができました。それが、工業化社会になると、一斉教育・集団教育・能率主義のため、皆が同じペースで勉強するようになりました。

今日、さらに、これがぐるっと回って、e-learning が登場しました。オンデマンド授業などは、寺子屋の時代、子どものそれぞれの能力・生活の都合に合わせた、学びのスタイルが復活したかに見えます。しかし、MOOC で世界の大学の講義が聞けるようになり、学びの世界は、着実に便利な形になって、進歩・発展をとげています。単なる歴史の繰り返しとは違っているわけです。

また、今日では、新学習指導要領の下で「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善が求められています。文科省の HP を見ると、授業の深まりが、これもらせん状の絵で説明されていることがあります。

これまで教育フォーラムでは、教育における理論と現実、研究と実践をめぐり、さまざまな意見が出て、対立や議論になりました。でも、対立や矛盾はチャンスです。「行学一如」は、お互いに対立する二つのもののどちらか一方を否定するものではなく、両者を肯定し、結合し、より高い次元へ発展させていく道筋を示しているのではないのでしょうか。

対話 (dialogue) は、真理 (logue) を分かち合う (dia) という語源からなっています。弁証法の考え方の一つに対立物の「相互浸透」というのがあります。相手を打ち負かす討論ではなく、ただ意見を出すだけでなく、お互いの考えが深まっていく「対話」を心がけていけば、「行学一如」の精神に近づけるのではないかと思います。

今回の教育フォーラムでは、卒業生だけではなく、在学生あるいは一般の方々の参加もあり、問題の共有や活発な意見交換が行われました。卒業生にとっては、リカレント的な意味合いを持つと同時に、学生にとっては現場の抱える諸問題や雰囲気を知る良い機会になったことと思います。参加された皆様には感謝申し上げます。来年度のご参加をお待ちしております。

(2021 年 12 月)



「2年ぶりのフォーラムを開催して」

東北福祉大学 教育学科

学科長 石原 直

本日、2年ぶりに教育フォーラムが開催できるのは、外部からご参加いただく皆様、ご担当いただく先生方と実行委員の学生さん方のおかげであると、心より感謝を申し上げます。

コロナウイルスの蔓延に伴い、私たちの日常は大きく変わりました。特に学生さんたちはいろいろな場面でご苦労されてきたこととお察しします。本学も昨年度はほとんどがオンライン授業となり、今年度になってやっと対面授業ができるようになってきました。当たり前だと思っていた日常が、未知のウイルスで簡単に変わってしまう。その恐ろしさを私たちは身をもって感じてきました。

しかし、私たちはこの困難な日常を過ごしていく中で、ただ流れに身を任せていくばかりではなく、どのように生きていけば良いのかを考え、その中で、人との関わり大切さやありがたみなど、様々なことを学んできました。

このようなときに、オンラインという手法で教育学科の教育フォーラムが実施できることは、本当に喜ばしいことです。フォーラムの中には、昨年度から学んだ Meet や Zoom などのオンライン授業の効果的手法が活かされていることと思います。

私たちが関わっている教育の世界では、「不易と流行」という言葉で表されるような、変わってはいけないもの、変わらなければならないものがあります。変わってはいけないものは、子どもたちが自分や周りの命を大切にすること、人との関わりや学びを通して、より良い成長を遂げることなどがあります。また、変わらなければならないことは、今であれば、ICTを活用した学習などがそれにあたると思います。

本日の教育フォーラムは、オンラインで行われるものであり、まさに、ICTを活用した研究実践の場でもあります。

また、本日は、幼保、初等教育、中等教育、特別支援教育など、校種や課題に応じた発表や討議が行われることと思います。卒業生の皆さんや外部から参加の先生方については、日頃の実践や考えを発表したり検討したりすることで、ご自身の学びを深めることとなり、学生さんたちは、教育現場の実際や課題を知り、これからの学びに結びつけていけるものになると思います。

本日の教育フォーラムが、ご参加いただいた皆様方にとって、実り多きものとなり、明日からの教育実践の糧となるよう心から願うものです。

このフォーラムが開催されるにあたり、準備から実施まで、様々なご苦労があつて今日を迎えたものと思います。先生方や実行委員の学生さん方に重ねて感謝申し上げ、学科長挨拶とさせていただきます。



「T F U教育フォーラム 2021」開催にあたって

東北福祉大学大学院教育学研究科

研究科長 岡田 清一

本日は、「T F U教育フォーラム 2021」に、沢山の方々にお出でいただき、誠にありがとうございます。感謝申し上げます。

このフォーラムは、平成18年度に設立致しました子ども科学部子ども教育学科を卒業した皆様に、日頃の実践や自身の学びの成果を報告していただき、それに対して異なる視点からの意見や批判を得ることによって、自らの実践がより深められるのではないかの考えのもと、平成24年度から始まりました。その後、平成27年4月、学部等再編により新たに「教育学部教育学科」がスタートし、同時に大学院教育学研究科が発足しましたが、教育界の諸課題に対応するためにも、本「教育フォーラム」の存在意義はさらに高まるものと思います。

現在、社会の価値観が多様化するなかで、学校教育の現場では多くの課題が山積し、児童・生徒は危機的状況のなかにあるともいわれます。また、近年では、教育職員の実質的な勤務時間に対する関心が高まるなかで、それへの対応策も考えられ始めています。

学校教育が、学校だけで成り立つものではなく、地域社会や家庭との連携が切に求められているなかで、普通学級にも何らかの支援を必要とする児童・生徒の存在が少なくとも6パーセントは確認されており、かれらを含めた共生授業、インクルーシブ教育の確立が早急に求められてもいます。

そのような状況下にあって、多くの教育職員は児童・生徒達の成長を念じて悪戦苦闘しております。しかし、教員が一所懸命すればするほど、「教室の王様」になる可能性は大きくなります。それを解消するためにも、日頃の教育実践を外部に提示し、第三者からの批評や意見を得ることは、自分自身を振り返ることになるばかりか、それは子ども達の成長に寄与しえるのではないかと考えております。

こうした教育実践の具体像を外部に提示する方法は、言葉で示すか、文字で示すかの2通りしかありません。「教育フォーラム」はその前者になりますが、その積み重ねが自分自身を大きく変容させ、成長させていくことを確信しております。

皆様におかれましては、各分科会での報告から多くの成果を感じ取り、これからの時間が有意義なものになりますことを祈念します。

第1分科会（初等教育：幼保）

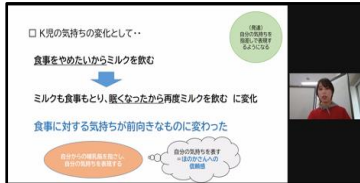
<第1分科会記録>

司会：高橋 菜央，千坂 妙恵

参加者：卒業生：6名，一般：26名，在学生232名，本学教員10名 計274名

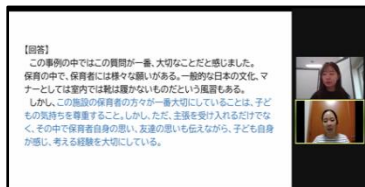
第1分科会では、「3歳未満児の部」と「3歳以上児の部」の2部構成により本学卒業生4名の保育実践事例提供と、それに基づく研究報告を「発達プロジェクト」学生が行った。

1. ①乳児保育の実践事例 0歳児クラス「3歳未満児の部」



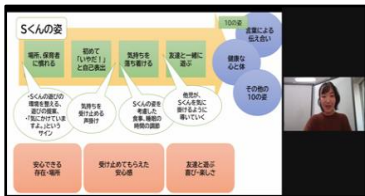
伊藤ほのか先生(平成30年度卒業)より実践事例提供。対象児は食事が進まない乳児。食事の際に動き回るという姿から食自体には興味があると捉える。姿勢やマナーよりも、信頼関係に応じた言葉かけや寄り添った姿勢、受容的関わりを大切に、楽しく食べることに特化した関わりの事例とその分析を紹介した。

2. ②1歳以上3歳未満児の実践事例 1歳児クラス「3歳未満児の部」



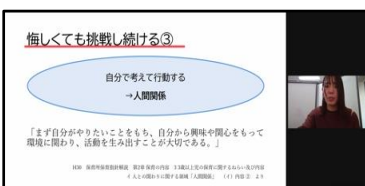
岸本唯先生(平成25年度卒業)が当該児童の保護者として事例提供。対象児は、憧れていた友達の長靴の貸し借りにおいて苦い思いをしていた。保育者は、興味、関心を捉えた子ども本意の解決策を提案した。すると、夢中になり何日も続けて遊ぶ姿に発展した。大人の都合やマナー以上に子どもたちのやりたいものを存分に引き出すことの大切さを知る機会となった。

3. ③保育実践事例 3歳児クラス「3歳以上児の部」



井上裕美子先生(平成22年度卒業)より実践事例提供。対象児は、入園当初から感情の表出が乏しい。友達から自分の好きなものを取られると思った際、初めて「嫌だ」と言葉にし、涙を流し自分を表現した。それを機会に保育者は安心して感情表出できる環境を整え丁寧な関わりを行った。育まれた安心感を土台とし、3歳児の年度末には友達と楽しく遊ぶ姿が見られるようになったその経緯を丁寧に読み取った。

4. ④保育実践事例 4歳児クラス「3歳以上児の部」



大久保美紗先生(平成28年度卒業)の実践事例提供。対象児は、一人遊びが好きで友達とかかわることが苦手であった。思い通りにならなくとも、保育者が子どもの気持ちをくみ取り、一生懸命取り組んだことを認める言葉かけを継続したことで、挑戦する姿勢が生まれ体を動かす楽しさや喜びを伝えるまでに至る成長の過程を分析した。詳細は本学HP 保育士幼稚園課程「ぴよねっと」に掲載。

<分科会全体の様子>

卒業生からの事例を中心として、その工夫ある実践を文献等と照らし学生が読み取りまとめたものが年齢、発達に沿って報告された。その報告に対して現役園長、他の保育者養成校教員、行政関係者などのゲストからコメントをいただくなど活発な交流が行われた。

<感想>

コロナ禍において保育現場も様々な変化を求められるが、第一に、子どもの気持ちに寄り添う保育を大切にしていきたいと改めて感じた。保育の実践事例では、一見、マイナスに見える子どもの姿でもプラスに捉える視点を持ち、対話を深めていくことで子ども真の気持ちに近づくことができると学んだ。(記録者：佐藤玲，末永あかり，大江佑奈，阿部紗理夏)

0歳児「健やかに伸び伸びと育つ」の事例から学ぶ

18ET058 門脇亜美佳 18ET175 釣舟さくら 18ET212 三品香純

1. 実践事例研究の背景

0歳児の事例は、食事の場面が取り上げられていて、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿（10の姿）」の中で、特に私たちが着目した「健康な心と体」に繋がる事例だと考えたため、この事例を選んだ。さらに、事例は食事の場面ではあるが、食事に関することだけでなく、保育者の関わりを通して様々なことが見えてきた。

一見遠く離れて見える0歳児と5歳児の姿だが、5領域と「10の姿」は、乳児期の3つの視点が基盤となっているということを私たち自身はもちろん、同じ保育者を目指す友人、後輩と保育所保育指針解説を用いて確かめていきたいという思いがあった。その為、まずは私たちが、事例にある0歳児の子どもの姿や保育者の関わりから、その後、どのような姿に繋がっていくのか、興味を持って探求していったのが始まりだった。

2. 実践事例研究の方法・内容

実際に現場で働かれている先輩が経験した、0歳11か月の女兒の、食事の場面の事例を取り上げて、事前インタビューをさせて頂きながら学びを深めてきた。保育所保育指針解説を基に乳児保育の3つの視点から成長を捉え、さらにその先にある「5領域」を見据えた事例当時の子どもの姿と保育者の関わりについて探求した。さらに、著しく成長していく0歳児の発達の姿も絡めながら、乳児保育の大切さについてまとめた。

3. 考 察

(1) 子どもに対する保育者の関わり

子どもにとって、ミルクから離乳食に移ることは未知なる世界に足を踏み入れることと一緒にある。そのため、今回の事例のように、スムーズに離乳食に移ることが難しい場合も多いと思われる。「食べてみよう」という子どもの前向きな気持ちを引き出すためには、前提として側にいる保育者が子どもにとって安心できる存在でなければならない。その為には、大人の都合で食べさせるといった援助を行うのではなく、今の子どもの姿や思いに寄り添い、応答的に受け止めることがとても重要な関わりであると考察する。

(2) 乳児期の3つの視点と5領域の繋がり

乳児期の3つの視点から、事例を深く探求したことで5領域の視点からも子どもの姿にアプローチすることができた。このことから、0歳児の姿や保育者の関わりは、5、6歳児の姿にも繋がっていることが分かり、乳児保育は幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の基盤であると考察する。

1歳以上3歳未満児「健康」の事例から学ぶ

18ET103 佐々木 彩 18FS410 森 麻尋

1. 実践事例研究の背景

今回、1歳以上3歳未満児の「健康」の中でも1歳8か月の男の事例を選んだ。これは、私たちが「10の姿」の「健康な心と体」に視点を当てて子どもの成長を見て行こうと考えた際に、この事例は子どもの心を十分に満たす事例であると思ったためである。つまりは、この事例で該当する園児が「健康な心」を養っていくと考えたためだ。また、保育者の対応の仕方も自分では考えられないような事例であり、大変興味を持ち、保育者の意図や裏付けとなる部分を深く調べたいと思ったのが始まりであった。

2. 実践事例研究の方法・内容

1歳8か月の男の子の事例を取り上げて、保育所保育指針解説を基に事例を深堀してきた。これは、1歳以上3歳未満児「健康」のねらいに沿った事例である。まずは、そこから得る子どもの学びやこれからの成長にどうつながっていくのかを中心にまとめた。次に、ここでの保育者の対応の意図や実践の根拠となる部分を、保育所保育指針解説から抜き出し、保育者の関わり方をまとめた。

3. 考 察

(1) 1歳8か月の子どもの学び

1歳8か月の幼さで、外と中という概念をも遊びの中から学び、思う存分遊ぶ中で、子どもの「ほどほど」という気持ちの切り替えのタイミングを学ぶというのがこの事例の面白さである。この事例では、運動機能面の発達は見られなかったものの、心の発達、育ちについては、強く感じられたと思われる。

(2) 保育者の関わりを学ぶ

今回の事例の中で、普段なら見逃してしまうような子どもの興味・関心を敏感に感じ取り、子どもの気持ちをただ受け入れるのではなく、受け止めたうえで子どもと大人の気持ちのいい着地点を見つけていく保育者の姿が見られた。子どもを「子ども」として捉えるのではなく、「お客様」「1人の人間」として捉え、言葉遣いや保育者の瞬時の判断と対応に驚かされたのではないかと考察する。

3歳以上児 領域「健康」の事例から学ぶ（3歳児の事例）

18ET010 荒 梢 18ET181 長嶋 梨央

1. 実践事例研究の背景

5 領域、3 つの視点、「10 の姿」など、多角的視点で保育を捉えて学びを深めるために、本学の卒業生で、現在保育者としてご活躍されている先輩方から事例を提供していただいた。その中でも、子どもの気持ちに寄り添って、安心できるような温かな関わりや、子ども一人ひとりの生活環境等に応じた保育者のきめ細やかな配慮など、子どもの「健康な心と体」を育む上で大切なことがたくさん詰まっているこの事例を選んだ。

2. 実践事例研究の方法・内容

実際に現場で働かれている先輩が経験した、3 歳児の男児の事例を取り上げて、事前インタビューをさせていただきながら学びを深めてきた。保育者の継続的で温かい関わりにより、心の安定を支えとして成長していく男児の姿と、その際の保育者の関わりについて、その意図やねらい、願いに重点を置いて事例をまとめた。最終的には保育者の関わりが「10 の姿」に繋がっていくことを見据えた資料の作成を行った。

3. 考 察

(1) 子どもに対する保育者の関わり

初めての園生活に戸惑いを見せ、気持ちを表現することができなかった男児に対して、保育者は温かな関わりを行い続け、男児の成長を丁寧に汲み取り、働きかけと見守りを行なっていった。そしてその関わりは、子どもを信じて成長を見守っていく中で自然と「10 の姿」に繋がっていくものであると私たちは事例を通して学んだ。

保育とは、場面と場面がそれぞれ別々であるのではなく、過去と今、そしてこれからの子どもの姿へと繋がっていくもの、そして保育者は継続的に働きかけるものであるだろうと考える。

(2) 「10 の姿」へ繋がりのある保育

一見マイナスに捉えてしまいがちな男児の姿を「成長のきっかけ」としてプラスに捉え、男児に合わせた前向きな関わりを行った保育者の関わりは、事例の時点では、まだ先のここのように思えるが、いずれは「10 の姿」に繋がっていく、小さなようで大きな第一歩であると捉え、子どもを信じ、前向きな気持ち、願いをもって働きかけを行ない続けるものであった。そしてそれは、子どもの成長を願って保育を行い、その結果、自然な形で指針と通ずる保育となっていくのだと言えよう。

3歳以上児「健康」の事例から学ぶ（4歳児の事例）

18ET173 土屋 知帆 18ET224 守屋 佳奈

1. 実践事例研究の背景

子どもの姿から「10の姿」に関連するのは、どこかについて考えることを主として事例検討を行った。また、どのような意図で対象児と関わったのかを知るために事例を提供してくださった保育者から実際に話を聞き、子どもの様子、保育者の関わりについて学びを深めてきた。実際に自分たちが考えていたことと異なる意図に気づき、また、予想もしていなかった子どもの姿について捉えながら、事例の深掘りを行った。

2. 実践事例研究の方法・内容

実際に現場で働かれている先輩が経験した、4歳児の男児のかけっこでの事例を取り上げて、先輩に事前インタビューを行い、保育所保育指針解説を基に事例を、深掘りをした。この事例は、3歳以上児の5領域の中の「健康」のねらいに沿った内容である。事例の中でのかけっこの活動を通して、子どもがどのように成長していくのか、そして何を学び、何に気付くのかを自分たちなりに考察した。また、「10の姿」の中の何に関連するのかを考え、保育者の関わりについてもまとめた。

3. 考 察

(1) 子どもの姿と「10の姿」の関わり

4歳の男児がかけっこを通して「体を思い切り動かして遊ぶ楽しさ」を知り、戸外で友達と一緒に遊ぶようになった。それは、かけっこをしたことにより男児が、順位よりも走る達成感を味わう心地よさに気付いたこと、友達と一緒に遊ぶ楽しさを知ったからであると考えられる。そして、戸外に出たことで男児は、今まで以上に様々なことに気づき、学ぶようになったと思われる。

(2) 保育者の関わり

保育者は、子どもの様子を細かく観察しており、子どもの様子に合わせた関わりを行っていた。そして、子どもの思いを尊重しながらも活動に誘うなど、子どもが意欲的に活動に取り組めるように関わっていた。普段から子どもの様子を観察し、子どもに対して、今後どうなってほしいのかという「ねらい」「願い」をもって関わるのがとても大切なのだと考察する。

<第1分科会 アンケート>

1 所属、職業等について（103件の回答）

在学生 91 名（1 年 2 名，2 年 8 名，3 年 46 名，4 年 34 名，大学院生 1 名） 本学卒業生 4 名，東北福祉大学以外の学校に所属する学生 1 名，東北福祉大学以外の大学関係者 2 名，保育現場関係者 2 名，保育者 1 名，教育行政関係者 2 名

2 学生の発表について

「とても有意義だった」85%（88 名），「有意義だった」15%（16 名），「あまり有意義でなかった」0%（0 名）「有意義でなかった」0%（0 名）

<ご意見>

- ・学生の皆さんのこれまでの学びの深さが十分に発揮された発表であった（教育行政）
- ・子供の発達の過程をよく学ばれ，「10 の姿」に落とし込んでいた（教育行政）
- ・事例を基に様々な観点から深掘りしていて，感化されました。私も保育について学びを深めていこうと思いました。（東北福祉大学以外の学校に所属する学生）
- ・学生さん達が一生懸命学んだ様子がよくわかりました。本学の学生にも同じような学びをして欲しいと思っていますが…（東北福祉大学以外の大学関係者）
- ・実際に見ていない事例をもとに考察することは，難しさもあると思いますが，思考を広げ，多様な受け止めができると思います。保育の中では，子どもの姿をいろいろな方向からみて，気づき，考察し，振り返ることが必要ですので，様々な見立てを共有し，指針に落とし込んでいくことを学生のうちに経験し身につけていくことは素晴らしいです。（保育現場関係）
- ・丁寧に保育所保育指針に照らし合わせながら読み解いておられたのは，今後の学びに繋がるものと感じました。（保育現場関係）
- ・しっかり言語化，可視化されていて非常に見やすいパワポでした。（卒業生）
- ・現場に生かされる視点がとてもありました。改めて，自分の保育の反省になりました。（卒業生）
- ・実際の場面を通して，そこから指針や「10 の姿」，3 つの柱，5 領域を学べたことは，本当に勉強になりました。指針に書いてある言葉が難しかったり，なかなか理解しづらいことがあったりしましたが，今回の発表を聞いて，どういうことなのかを具体的に知ることができて，本当によかったです。（在学生）

3 学生の発表に対する講評・見解について

「とても有意義だった」83.5%（86 名），「有意義だった」16.5%（17 名），「あまり有意義でなかった」0%（0 名），「有意義でなかった」0%（0 名）

<ご意見>

- ・一つ一つの言葉が印象に残るものばかりでした。
- ・事例に対して，肯定的に考えを述べられていてとても勉強になりました。資料もとても見やすくまとめられていて重要な部分が何なのかははっきりと分かるようになっていてとても感動しました。今後の勉強にも生かしていきたいと思います。

- ・学生の発表に関するご講評と共に、今の学生に求められていること等、発表の内容を踏まえて、学生に向けたお言葉をいただけたことがとても貴重な機会でした。学生と保育施設や現在の保育の現状の双方をよく理解している先生方からのお言葉をいただけて、卒業は近いですが、保育の学びを止めずに、さらに学び続けていかなければならないと身が引き締まる思いです。

- ・養成校の先生や、現役保育者の方に登壇いただき、とてもリアルな話し合いを聞いた。

4 第1分科会（幼保）についてのご意見、ご感想、ご要望など

- ・発表がとてもレベルが高いうえ、まだまだ学ぶことが多くて今回参加できてよかったと思いました。
- ・一つ一つの事例に対してたくさん考えて考察されていて、インタビューコーナーなどもありより深く学びを深められるような発表でした。自分だったらどう捉えるか、どのような対応ができるか考えながら聞いていましたが、もっと勉強をする必要があると感じました。今回の発表のスライドを共有していただいたので、また見直してさらに学びを深められるようにしていきたいと思いました。素敵な発表ありがとうございました。
- ・現場の先生方や他大学の先生方からのご講評等の中で、東北福祉大学保育士課程全体としてお褒めの言葉をいただく場面があり、普段行なっている学びを肯定された気持ちになり、「これからも頑張ろう!」と思うことができました。
- ・先輩方が集めてくださった事例の中で子供がなぜそのような行動・言動をするのかを考察して、子供を尊重した行動を取って、私も事例提供された方々のような保育者をめざしたいと思いました。私はまだ大学一年生でTFUでの保育の学びを十分に体験できていないため、保育現場の実際など知らなかったのですが、先輩方の説明が分かりやすくとても学びが多かったです。これからも3年間の保育の学びが楽しみになってきました。
- ・質の高い保育を実践するために、質の高い学びをされていることがよく分かりました。学ぶことに最も必要なのは、学び方を知ることだと思います。学生時代に、これほどの学びを試行錯誤しながら経験されていることは、大変貴重な経験であると思います。学内に留まらず、広く学びの機会を頂戴しましてありがとうございました。
- ・主体的対話的学びでありつつ、幼児期の終わりまでに育って欲しい「10の姿」という現場でも多岐にわたるためどのようにまとめていいか苦労しているところにも、チャレンジしているところが素晴らしいと感じました。小学校の先生の分科会もあると伺ったので、今度は是非、「10の姿」の視点で、幼児教育を目指す学生さんと学校教育を目指す学生さんで取り組まれても面白いかもしれません。
- ・他県の大学の先生や現場の先生、行政の方など様々な人が同じ会に関われたことがとても学びを深いものにすると感じた。
- ・このような高度な内容のフォーラムを学生の皆さんの力で開催することができることが大変素晴らしいと思います。準備・運営に関わられた学生の皆様、ご指導なされた東北福祉大学の先生方、大変お疲れ様でした。学びの機会をいただき、ありがとうございました。

第2分科会（初等教育：小学校 A）

<第2分科会 記録>

司会：柴橋 宗太，鈴木 里桜

参加者：卒業生：4名，一般：1名，在学生76名，本学教員10名 計91名

第2分科会では3名の卒業生の発表があった。

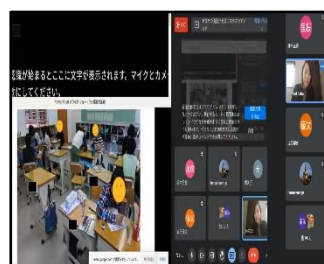
1. 三浦拓先生（平成26年度卒）は、「マルチレベルアプローチ型（MLA）の協同学習を用いた言語活動の促進」と題して発表した。MLA型とは、授業の中に良質なコミュニケーションの場を創出しようとする取り組みである。児童生徒の対人関係や学習への適応感を高めることに有効である。今後は MLA 型を積極的に取り入れ、より子供たち同士で創り上げる授業を目指し、ICT 活用の促進に取り組むと報告した。



2. 支倉絵璃先生（平成24年度卒）は、「コロナ禍における主体的・協働的な学習の充実を目指したデジタル機器を活用した実践」について発表した。「子どもの学びを止めない」ために、YouTubeでの授業動画配信やオンラインツールの活用、第2学年算数ではタブレットで図を描き、主体的に考え、考えを共有する協働的な学習を取り入れた。ICTを活用する目的や機会をしっかりと吟味し、積極的に活用していくのが今後の課題と報告した。



3. 馬場ひとみ先生（平成23年度卒）は、コロナ禍の中国では、SNSでの会議や児童にPDFで課題を添付するなどし、帰国後はロイロノートを活用した授業などについて発表した。また、リモート交流によって児童が海外の学校の違いや学びを深める学習を行い、多文化へ触れる機会を与えたり、多文化交流を推進したりと、リモートのメリットを活かし視点を広げた教育を行っていることを報告した。



<感想>

目まぐるしく変化する児童の実態や教育環境の中で、変化に伴い児童に求められている力を最大限に伸ばす指導方法を試行錯誤することが、今後教師に求められていくことだと強く感じた。3つの発表は全く違う視点からであったが、現場を経験していないと分からないことや気付かないこと等を細かく説明していただき非常に勉強になった。

（記録者：浅野真衣子，大河内美穂，高橋萌）

マルチレベルアプローチ型（MLA）の協同学習を用いた言語活動の促進

三浦 拓（宮城県・石巻市立飯野川小学校・平成24年度卒）

1. 実践の背景

石巻市では、「協同学習」というものを取り入れている。協同学習とは、日々の授業の中に良質なコミュニケーションの場を創出しようとする取り組みで、児童同士で自分の考えや思いを共有し合ったり、役割を受け持ったりしながら互いに心や力を合わせて取り組む学習方法である。この取り組みにより、良質な人間関係を促進し、児童生徒の対人関係や学習への適応感を高められるとされている。

現在私が受け持つ学級の児童は自己肯定感が低く、学習の中での話合いや、授業中に発言する児童が固定化されていた。また、学力が二極化した状態で子ども達の学習に対する意欲も低下していた。そこで、この協同学習を用いて児童全員が参加できる授業を目指そうと考えた。また、本年度の本校の研究テーマにも協同学習を位置づけ、以前よりも協同学習について理解を深めることができたこともあり、協同学習を用いた授業改善を行おうと思い立った。

2. 実践の方法・内容

今回の実践で重要視したことは3点である。この3点を主軸に算数の授業を行った。

1点目は課題やまとめを自分で書かせることである。学習は子どもたちが課題を課題と思わなければ意欲も出ない。そのため、必ず児童の言葉を紡いで課題を設定している。また、まとめも自分の言葉で書かせている。その後、子ども同士で自分たちのまとめを共有し、自分のまとめを訂正したりしている。

2点目は個人で考える時間を十分に取ることである。様々なオプション（ヒントカード、タブレットなど）を準備して自分の考えを持たせた。また、自分の考えをまとめる時間も十分にとり、グループやペアワークに備えさせた。

3点目は話し合いでの役割を明確にすることである。話し合いでは暇な時間ができないようそれぞれ役割を決めた。「全員がしっかり話し合いに参加しなければグループの発表が失敗してしまう」という危機感を持たせた。

3. 考 察

<「子どもたち同士で作る授業」への転換>

私は、極論だが、教師がいなくても成り立つ授業が理想だと考えている。それは、学習指導要領が改訂されて「主体的な学び」が重要視されてきたことと、講義型のような先生が子ども達に教える学習は辛く、退屈だと感じるからである。教師の言葉は届かなくても友達の言葉であれば届く。そういった場面を私は幾度となく経験してきた。「子どもたち同士で作る授業」というものが、今後より一層必要になってくると考える。子どもたちの可能性を信じて託してみることが大切である。

<ICTの充実が協同学習の幅を広げる>

新型コロナウイルス感染拡大防止で学校の生活は大きく変わり、協同教育の要でもある「良質なコミュニケーションの場」が減ってしまった。しかし、タブレット端末が児童1人に1台配備されたことにより、新たな可能性が出てきた。「Meet」や「Jamboard」など直接会わなくてもコミュニケーションが取れる環境が整ってきたのだ。こういったICTの活用も考えて言語活動が停滞しないような学習の工夫を行っていく必要があると考えている。

デジタル機器を活用した教育実践

～コロナ禍における主体的・協働的な学びの充実を目指して～

支倉 絵璃（東京都・中央区立久松小学校・平成22年度卒）

1. 実践の背景

新型コロナウイルス感染拡大防止のための対策で、東京都では体験的な学習や学び合いの機会が減ってしまった。そのため、主体的に学習したり、協働的な学習の機会を設けたりするためにはどうしたらよいか試行錯誤で授業を進めていた。そんな中、私の勤める中央区では、予定を早めて一人一台のタブレットが配布され、活用が始められた。担当する校務分掌はICT主任であるため、感染拡大防止の対策をとる中でも、自分の意見をまとめたり、意見を交流したりできるような授業提案を行うため実践を重ねてきた。

2. 実践の方法・内容

学年・教科・単元名

第2学年 算数科「図を使って考えよう」（東京書籍）

	学習内容	デジタル機器の活用場面
1	・テープ図を基に数量の関係をとらえる。 ・加法逆の減法の問題場面であることをとらえ、問題を解決する。	・タブレットの発表ノートでお話の順番に図を使って考え、求めるのは「部分」であることをとらえる。
2	・テープ図を基に数量の関係をとらえる。 ・減法逆の減法の問題場面であることをとらえ、問題を解決する。	・まとまりごとに区切った発表ノートを配布し、お話の順番に図に表せるようにする。分からない数を□として大体の長さで表し、図を書いていくことを確認する。
3	・テープ図を完成させ、数量の関係をとらえる。 ・加法逆の減法の問題場面であることをとらえ、問題を解決する。	・タブレットの発表ノートで3枚の白紙のページと式と答えを記入するページを配布する。 ・スクリーンに発表児童の発表ノートをスライドショーで提示し、考えを共有する。
4	・減法逆の減法の問題作りを行う。 ・作った問題場면을テープ図に表し、問題を解決する。	・ドリルパークの問題に取り組む。
5	・問題演習	・ドリルパークの問題に取り組む。

3. 考 察

（1）ポストコロナで継続していきたい活用とその効果

コロナウイルス感染拡大防止の対策のために行ってきたICT活用の推進だが、結果的にポストコロナにおいても継続に非常に効果がある実践が多くできた。授業中、児童の取組について全体を一目で把握し、共有を行うことができるようになった。

（2）ポストコロナでの改善点

児童の健康を考えた活用時間、ルールの確立・セキュリティ面と活用のバランスなどの情報モラル面の課題、年間指導計画への反映など多面的に改善することが必要である。

自分の未来を切り開く ～在外教育施設での実践～

馬場 ひとみ（宮城県・利府町立利府小学校・平成23年度卒）

1. 実践の背景

大学在学時から「海外の学校で働いてみたい」という希望があり、在外教育施設派遣に応募し、中国にある広州日本人学校へ派遣された。日本の約半分18万km²ある広東省の省都である広州は、華南最大の都市であり、高層ビルが立ち並び、日系企業の多くが事務所を構えている。広州日本人学校は令和元年度に創立25周年目を迎えた小学部と中学部がある小中一貫校である。

派遣3年目の2020年1月、新型コロナウイルスが猛威を奮い、厳戒態勢がとられることとなった。学校は長期休業後そのまま休校となり、いつ開校できるのか見通しが立たず、不安な保護者や児童生徒に対して何ができるか、教職員一丸となって案を出し合った。

今回は日本人学校での休校中の対応や帰国後の実践について紹介したい。

2. 実践の方法・内容

（1）日本人学校での実践

○メールでの課題送信

保護者への連絡手段としてメールを使用した。学校からのお便りや課題をメールを添付して送信した。

○児童生徒の学びの継続

アプリケーションを使用して課題を添削したりメッセージのやり取りを行ったりした。但し、それぞれ環境が異なるため強制ではなく、できる家庭のみを対象とした。

（2）帰国後の実践

○タブレットの活用

音楽の学習では、リコーダーの演奏をタブレットに録音して提出する、図工の学習では製作したものを写真で撮って見せ合い鑑賞する等タブレットの機能を活用して授業を実施した。児童も回を増すごとに使い方を覚えた。

○海外とのリモート交流

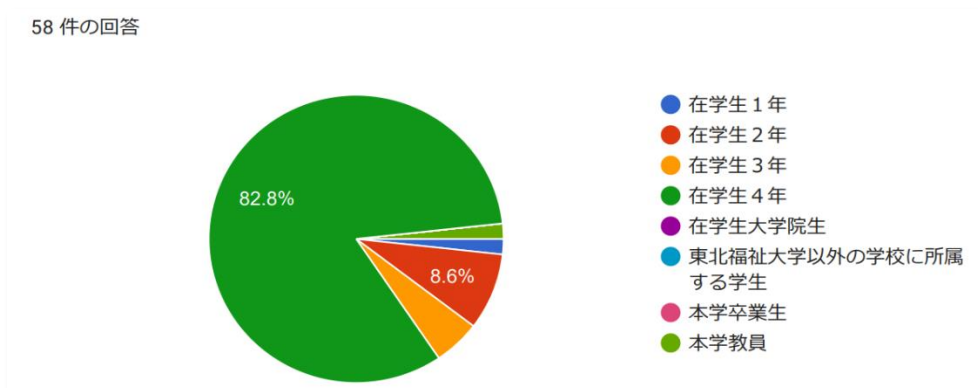
勤務していた広州日本人学校の児童との交流や、インドネシアの様子を見せていただく機会に恵まれ、児童にとっても貴重な経験となった。

3. 考 察

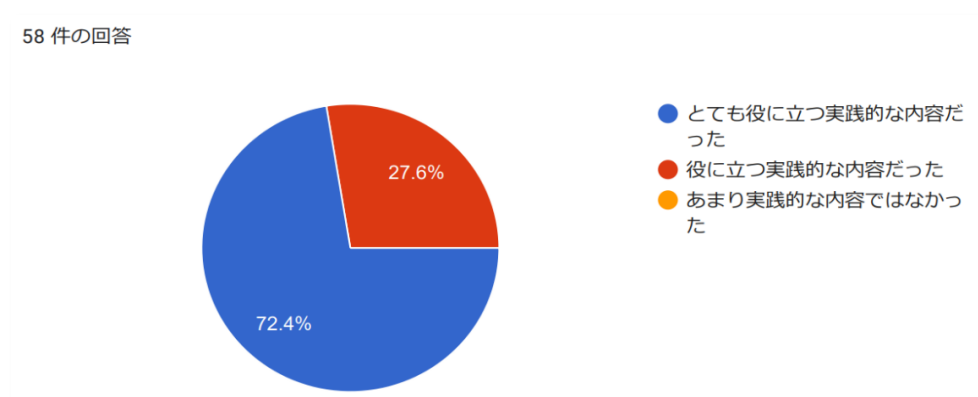
日本でも休校となり、休校が明けてからも感染症対策が求められた。人との関わりや学習活動に制限が設けられたが、そのような状況下でも学びを止めずにできることを工夫して実施してきた。今後も「できることを工夫して」行うことを心掛けていきたい。

<第2分科会 アンケート結果>

1 現在の所属、職業等について



2 内容について（教育現場で役立つ実践的な内容だったか）



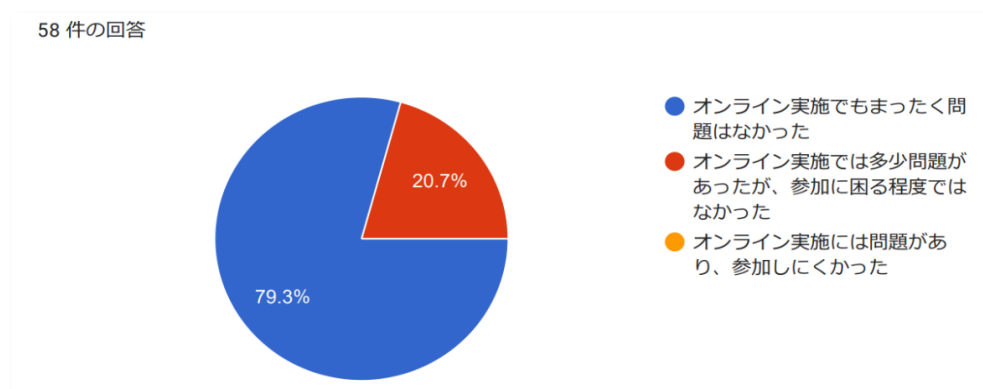
<ご意見>

- ・今回初めてフォーラムに参加させていただきましたが、福祉大を卒業された先輩方が今教育現場に携わってみて感じていることなどの生の声を聴くことができ、とても良い経験となりました。特に協同学習の実践的な方法が印象に残っており、大切な学習方法のひとつとして心に留めておきたいなと思いました。
- ・これから学校現場に出て、児童を教える立場になることに不安感を抱いていたのですが、今回の教育フォーラムに参加したことで、ICT 機器の活用方法や授業実践について詳しく知ることができたので良かったです。なかなか大学の授業の中だけでは学ぶことのできない現場の情報を先生方から教えていただき、4月から実践できたらいいなと思うことができました。
- ・教員になってからも日本人学校など在外教育施設で働くという方法もあるんだということが分かりました。
- ・東京都の先生のお話を聞くことができたので、関東ではどのように指導を行っているの

かを知ることができたので良かったです。来年度から関東地方で教員になるので雰囲気だけでも知ることができて安心しました。

- ・実践例を多く聞くことができ、今後の教育現場でやってみたいと思う内容ばかりでした。コロナ禍において学びが制限される部分も多くありますが、教員側が試行錯誤して子供たちにとって大切な思考力や判断力、主体性などを育ていけるようにこれからも多くの実践を聞きながら自分自身が学び続け、子供たちに還元していけるように努力していきたいと思っています。
- ・発表していただいた先生方の勤めている地域や児童の実態などに応じて、様々な指導法、何ができて何ができないのかといった観点の話を聞くことができ、私自身の授業の形態や目的に対しての見方・考え方が広がったように思います。

3 オンライン実施について



〈ご意見〉

- ・司会の方々や先生方のおかげで何も困ることなく学ぶことができました。ありがとうございました。初めて教育フォーラムに参加いたしました。今後もし機会があれば参加したいと思いましたし、様々な形で教育の実情を知る機会を逃さないようにしたいと思いました。
- ・オンライン実施ではありましたが、司会の方が円滑に進めてくれたことで教育フォーラムの流れを把握しやすく、参加しやすい環境でした。
- ・オンライン参加は学校から少し離れた場所に住んでいたので大変ありがたかったです。
- ・通信についても問題なく視聴できました。
- ・開会式も含め、スライドの上の字幕が見やすいと感じました。
- ・オンラインで実施していただいたため、移動に時間を使わずに、時間を有効活用することができました。ただ、画面が小さくて見にくかったことが気になりました。

第3分科会（初等教育：小学校B）

<第3分科会 記録>

司会：阿部 桃奈，遠藤 隼毅

参加者：卒業生：4名，一般：1名，在学生：88名，本学教員：7名

計100名

第3分科会では4名の卒業生の発表があった。



1. 伊藤里絵先生（平成27年度卒）は、子供が安心して過ごせる学級づくりで実践していることを発表した。日々の教師の声掛けや「当たり前」の徹底，互いを認め合う環境作り等について紹介し，思いやりの心や規律が身に付き積極的な発言が増え，子供が主体的に学べる環境になったといった成果が見られた。



2. 角川菜緒先生（平成26年度卒）は，コロナ禍での学級担任としての1年間の取り組みを時系列で発表した。小規模校で実践した感染症対策の工夫を，学級経営やICT活用の面から写真と共に紹介し，毎日のプランニング，2歩先から導く心持ち，新しい事を取り入れる余裕といった教育の不易と流行に触れた。



3. 鈴木智裕先生（平成25年度卒）は，ICT端末の活用について今後の展望と実践例を発表した。Jamboard導入のために作成した動画や学習アプリのscratchで作った教材を紹介し，若い教員としてアピールポイントを磨き教育現場に貢献することの大切さと，再現性・実現性のある授業の重要性について話した。



4. 佐藤忠郎先生（平成21年度卒）は，自己有用感の育成・向上を目指し「メリハリ」「全力」をモットーに実践していることを発表した。コロナ禍の厳しい制限の中，今しかできないことに全力で取り組む子供たちの姿があったのは，これまでの実践の中で，児童や保護者と築き上げた「信頼」にあると考察した。

<感想>

子どもと関わる上で大切な教師の姿勢や基本的な考え方に改めて気づくことができた。

4人の先生方の取り組みは様々であり，授業や行事における実践の工夫から教育の不易と流行について考えるきっかけになった。また，若い教員がICT教育をリードする自覚を持つ必要性や，コロナ禍の学校の在り方は終息後も継続する部分もあることを強く感じた。

（記録者：及川 麻帆，佐藤 育美，三浦 風香，渡邊 祐万）

子供が安心して過ごせる学級づくり

伊藤 里絵（宮城県・石巻市立中里小学校・平成27年度卒）

1. 実践の背景

今年度、現在の勤務校に赴任し、5年生を担当している。前任校での経験や日々の実践から、学力向上において重要なことは、教師の授業力はもちろんのこと、その前提として「子供たちが安心して過ごせる環境が整っていること」であると考えている。私が考えている安心して過ごせる環境とは、気兼ねなく意見を言い合えたり、分からないことを素直に分からないと言えたり、互いに認め合ったり、いじめやからかいなどで侵害されない人間関係が構築されていたりする環境だと思っている。そういった学級の雰囲気、活発な学び合いにつながり、学びに向かう意欲が高まっていくのだから、子供が安心して過ごせる学級づくりを大切にしたいと思ったことが実践の背景にある。

2. 実践の内容・方法

①教師の声掛けや雰囲気…日々の教師の声掛けや態度が子供との信頼関係を築いていく

- ・教師は常に余裕を持って機嫌よく
- ・教室はまちがうところ
- ・褒めるより認める
- ・傾聴と共感
- ・優しさと甘さの違い
- ・子供も一人の人間として接する
- ・叱る基準
- ・子供をまるごとめんこがる

②「当たり前」の徹底…子供が社会に出たときのことを考えて指導する

- ・挨拶、返事、礼儀、時間を守ること、話の聞き方、整理整頓 など

③モニタリング（子供同士のいいところ探し）…互いに認め合える関係づくり

④議題提案ボックス…自分の考えをいつでも誰でも発信でき、みんなで話し合っ て決める学級

3. 考 察

（1）全ての子供が主体的に学べる環境づくり

上記の実践から、学級の子供たちに思いやりの心が育ち、規律も身に付いてきた。その結果、生徒指導も少なくなり、授業では学習に集中し、積極的に発言する子が増えた。分からないところを聞いたり教えたりする姿も自然と生まれるようになった。

（2）コロナ禍での学校の役割

コロナ禍で、学校や家庭での活動が制限され、子供たちのストレスや人間関係の希薄化が昨今の課題となっている。家庭での問題を学校まで引きずってしまう子も少なくない。だからこそ、学校が子供の居場所になるような取組や教師の関わり方は重要なのではないかと思う。特に小学校においては、教師の関わり方が学級の雰囲気に大きく影響すると考える。

コロナ禍における卒業生担任の1年間の歩み

角川 菜緒（宮城県・角田市立西根小学校・平成26年度卒）

1. 実践の背景

大学卒業後、1年間の講師経験を経て、宮城県に採用され6年目となる。採用後2校目となる所属校は、県南にある小規模校で、本年度を持って閉校となる。新型コロナウイルス感染症の影響により、臨時休校から始まった昨年度（令和2年度）は6年生の担任になった。そこで、これまでの教職経験での学びが生かしきれない部分が多くあったこと、「コロナ禍だから」を理由に様々な制限を強いられたことにより新たな教師としての力量が問われる1年間となった。今回は1年間の学級担任としての歩みを振り返り、今後ポストコロナが想定される社会においても子どもたちが安心して学校生活を送るためにどうしたらよいか考えていきたい。

2. 実践の方法・内容

4～5月	臨時休校	・2か月間、児童は登校せず、学校から出された課題に取り組んだ。 ・教員はコロナ禍での行事等の計画や授業準備を行った。
6月～	通常登校開始	・新しい生活様式に基づき各場面で工夫して指導。 【学習全般】【給食】【掃除】【音楽】【家庭科】※PP資料参照
8月	夏季休業	・時数の遅れを取り戻すために、1週間程度に短縮。
9月	修学旅行	・自主研修中の移動は、貸し切りバスを利用。 ・しおりにマスク着用や消毒・検温のこと等を記載。
10月	運動会	・全校実施。児童同士の距離が確保できるよう種目や隊形等工夫した。
11月	学習発表会	・ステージ上で距離が確保できるように工夫（令和3年度合唱も実施） ・令和3年度はヘッドセットマイクを使用。
12～1月	冬季休業	・通常通り
3月	卒業式	・式中は基本的にマスクを着用。合唱はマスクを外して、2曲行った。

3. 考 察

（1）常に見通しを持つこと

いつ臨時休校になるか、いつオンライン授業になるか予測できないのがコロナ禍の現在。当たり前に行えることのほうが珍しいと思っておいた方がよい。1年間や1か月の始まりに、学習であれば各単元の時数の目安、特別活動であれば何をいつまでにしなければいけないのか確認しておく。可能であれば、前倒しで準備をし、行事の1週間前には、明日本番でも良いという心持ちでいることも大切であると感じた。

（2）常に新しいものを取り入れられる余裕を持つこと

この2年間で教育現場が大きく変わった。教員生活7年目であるが、ここまで大きく変わったと感じるのは初めてである。新しい生活様式、新しく導入されたもの（例えばICT機器等）に瞬時に対応する力が必要である。前の学校ではこうだった、昨年度はこうだったが通用しにくいのが現状である。子どもたちが混乱せず、安心して学校生活を送ることができるのが教師の役目である。教員が2歩前くらいを歩き、子どもたちを導いていけるよう、自分から積極的に学び続けることが必要なのではないかと考えた。

ICT 端末の効果的な活用法

一どの学校でも導入可能に一

鈴木 智裕（宮城県・仙台市立燕沢小学校・平成 25 年度卒）

1. 実践の背景

現在、学校現場では、GIGA スクール関係の業務に追われている。初めて使用する Chrome book の準備・実践に、膨大な時間をかけているため、通常の業務に支障をきたしている。

市教委は今年度に入ってようやく、GIGA スクール端末活用基礎研修というものを始めたが、全国の一取り組みに比べると遅れている状況だ。このままでは、学校ごとに格差が広がる懸念があると考えます。

そこで、本研究では、誰でも活用できる ICT 端末の効果的な活用法について計画し、実践に取り組むこととした。

2. 実践の方法・内容

- ・ Jam board（モバイルアプリ）を活用した、課題の作成方法の提案
- ・ 誰でも課題を作成できるような、PowerPoint（説明アニメーション）の作成
- ・ 誰でも無料で活用できる学習アプリの開発（scratch を使用）

3. 考 察

（1）Jam board を活用した課題作成

課題の作成といえば、Google form を使用するか、企業が提供しているアプリを契約して使うかの二択になる。企業のアプリを購入するための予算はない。Google form には自動採点の機能があるが、課題の提示の仕方に限界を感じる。Jam board であれば、手書きでの回答が可能である。また、課題は教師と児童の共有ファイルになるため、児童が問題を解いている様子を見たり、リアルタイムで丸付けをしたりできる。つまり、校内でも自宅でも同じように学習が進められることになる。

（2）scratch による学習アプリの開発

学習アプリに関しても、（1）の問題提起と同様で、企業のアプリを買う予算はない。市としては、各企業の無償期間に頼っているのが現状で、そのほとんどが今年度末で期限を迎える。Scratch は、本来は児童がプログラミングを学ぶためのツールだが、Web ブラウザさえあれば誰でもアクセスでき、無料のため、学習アプリとして活用できれば非常に汎用性が高い。私はこれまで、漢字の書き順や、都道府県名、足し算や掛け算など、今まで教員が膨大な時間をかけていた部分に焦点を当てて教材を作ってきた。このような無料の学習アプリの開発は、指導の効率化を促す。そして（1）と同様に、自宅での学習も充実させることにも繋がっていく。

『自己有用感の育成・向上』～「メリハリ」「全力」をモットーに～

佐藤 忠郎（栃木県・小山市立若木小学校・平成21年度卒）

1. 実践の背景

東北福祉大学 子ども科学部 子ども教育学科の一期生として卒業し、栃木県の小学校教諭として12年目を迎えている。学生時代から「子ども一人一人のよさを引き出す教師になる」という変わらぬ信念のもと、日々子どもたちと過ごしている。本校の学校経営の柱として「すべての教育活動は子どもたちの幸せ・成長のために～自己有用感の育成・向上 認め合い～」を掲げている。昨今のコロナ禍により改めてその重要性を感じている。今までやってきたこと、今だからこそやらなければいけないことをテーマに沿って発表していきたい。

2. 実践の方法・内容

○どの学年の担任になっても4月の始業式の日には必ず子どもたちに話すことがある。

⇒「どんなことにも『全力』で取り組み、『メリハリ』のあるクラスにしよう」

担任が何かあるごとにこの「モットー」に沿って指導を繰り返していけば子どもたちの意識は必ず変わる。

○子どもたち一人一人と「全力」で向き合う。

⇒子どもや保護者との信頼関係が構築される。

○児童指導主任として、学校経営の柱である「自己有用感の育成・向上」について児童指導と結び付けながら職員に呼びかける。

3. 考 察

（1）〈自己有用感の育成・向上のために必要なこと〉

自己有用感（他者や集団との関係の中で、自分たちの存在を価値あるものとして受け止める感覚）の育成・向上のためには自己実現（自分の可能性を最大限に発揮すること・目標を定め努力すること）が必要となり、そのためには自己指導能力（どのような言動が適切か自分で判断・決断し、責任をもって活動する力）の育成が大きな土台となり、3つの留意点がある。①児童生徒一人一人に、自己存在を持たせる。②児童生徒同士、児童生徒と教職員の共感的な人間関係をはぐくむ。③自己決定の場を設定する。これらを教師がしっかりと理解し、意識した上で子どもたちと向き合っていくことが大切である。

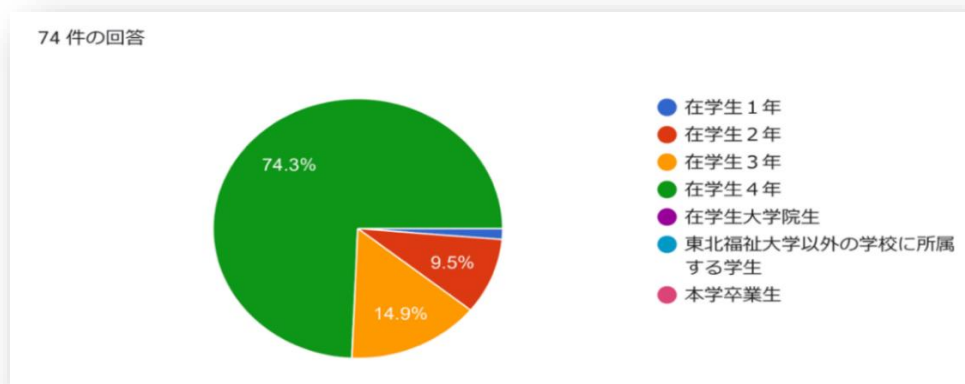
（2）〈児童や保護者一人一人と全力で向き合うことの大切さ〉

児童の自己有用感の育成・向上を目指していれば自ずと児童や保護者の信頼を得ることができる。一人一人の個性を理解するために教師が日々努力し、その子のその日に合った指導を繰り返していく。当たり前のことのように聞こえるが、これがかなりの時間と労力を要する。しかし、その先にはその子の笑顔が、そして明るい未来が待っている。全ての子どもたちの幸せのために我々教師が存在しているのだ。コロナ禍において不安感や厳しい制限の中での学校生活が余儀なくされた。子どもたちからすればストレスになり学校が嫌になってもおかしくない状況だった。

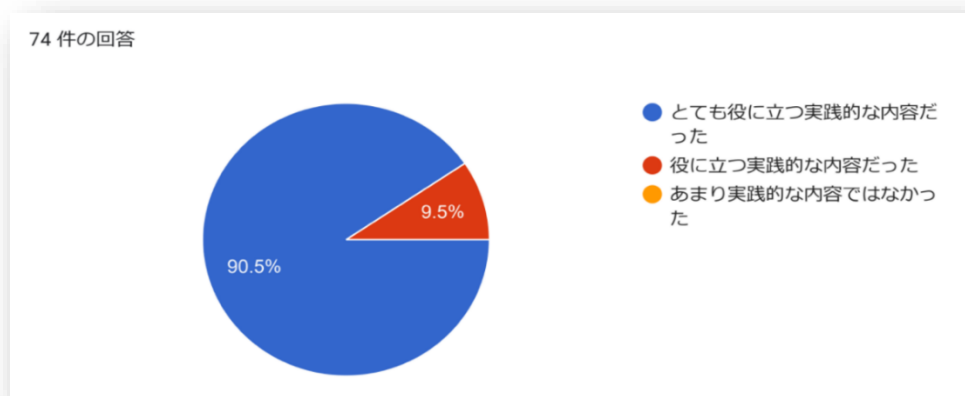
しかし、学校で勉強ができる喜びをかみしめ、今だからこそ、今しかできないことに全力で取り組む子どもたちの姿がそこにはあった。子どもたちや保護者との築き上げてきた「信頼」があったからこそである。子どもたちの不安を取り除くために、一人一人の「心」に寄り添う。保護者の切実な「声」に耳を傾け共に解決していく。コロナが収束してもそうした教育の原点ともいえる取り組みを続けていくことが、コロナ禍という未曾有の状況を乗り切ろうとしている我々に課せられたものだと思う。これから教師の道を歩み出そうとしている学生の皆様も、厳しい制限の中でさぞかしご苦労されたことでしょう。その経験を糧とし、未来のクラスの子どものために頑張っていただきたい。

<第3分科会 アンケート結果>

1 現在の所属、職業等について



2 内容について（教育現場で役立つ実践的な内容だったか）



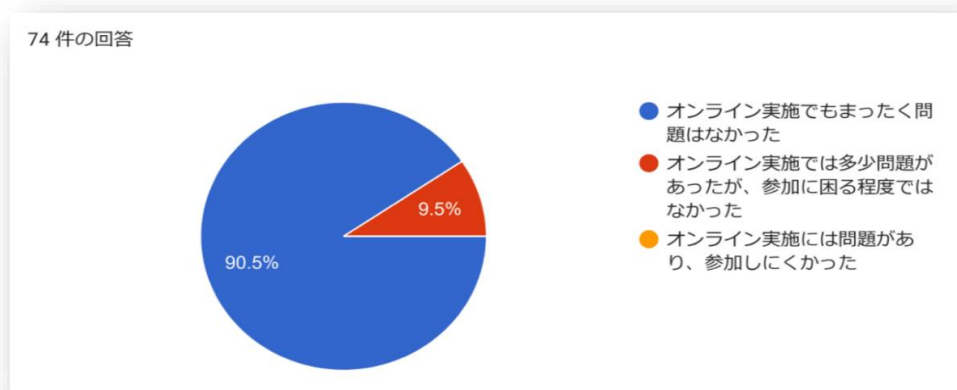
<ご意見>

- ・コロナの影響で、学校現場の様子を見に行く機会がまったくない状況だったので、今回、現場での教師や子どもたちの様子を知ることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。
- ・実際に現場で働く先生方の貴重なお話を聞いたことが本当に良かったです。コロナ禍が続く中で現場に出て働くことに不安を感じていますが、その中での取り組みや実態を学ぶことができました。
- ・学級経営の方法や子どもとの向き合い方など、教育者になる上で大切なことを多く学ぶことができました。また、コロナ禍での学校の様子や ICT 活用について、実践内容を含めて教えていただき勉強になりました。
- ・現職の教員の方々からお話を聞くことで実際の現場ではどのようなことが起きているのかを知ることができました。また、コロナ禍での学校の学びや ICT 教育について

でも経験をもとに知ることができたので良かったです。今後教壇に立つ立場として教師としての自覚を持ちながら過ごしていきたいと思います。貴重なお話を聞くことができて本当に良かったです。

- ・実際に現場で働いている先生方のお話や実践を聞く機会はあまりないので、とても勉強になりました。コロナ禍という時代にも絡んだお話や実践を聞くことができ、時代や環境に合わせて教育の日々の実践も変えていく必要があると感じました。
- ・学級づくりやコロナ禍での対応等を先生方の実践した内容を交えてどのように行っているのかを学ぶことができ、貴重なお話を多く聞くことができました。

3 オンライン実施について



〈ご意見〉

- ・運営委員会の方々がたくさん準備してくださっていたのが伝わってきました。オンラインでも全く問題なかったです。
- ・挙手ボタンで拍手や反応をするという方法が、ハウリングを起こさず、かつ発表者への敬意を示すための方法としてとても良いと感じます。
- ・進め方など司会の方がスムーズに進めてくださり、参加しやすかったです。
- ・教育現場における ICT の活用が重要視されている現代で、とても理にかなっている実施形態だったと思います。ありがとうございました。
- ・オンライン実施しか受けたことはありませんが、問題なく受けることができました。対面でのものも受けてみたくなりました。
- ・質問などは大勢の場だと聞きづらいので、チャットの機能を活用すると色々な意見が出るのではないかと考えました。

第4分科会（中等教育：中高）

<第4分科会 記録>

司会：阿部 竜大，大倉 日菜子

参加者：卒業生：2名，一般：3名，在学生：60名，本学教員：16名

計81名

第5分科会では，東洋大学文学部教授 栗原 久先生による講話と2名の卒業生の発表があった。

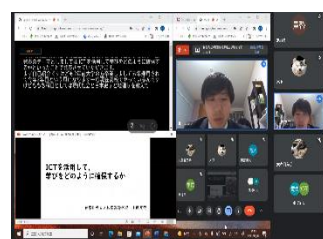
<講話と発表>



1.『「深い学び」を実現する公民的分野の授業—社会的事象に対する素朴な理解を踏まえて—』というテーマのもと，東洋大学教授の栗原久先生にご講話いただいた。素朴な見方・考え方に基づく素朴理論から科学理論への転換を図るように設計した授業の必要性や新しい見方・考え方を働かせる学習の充実について，多くの分かりやすい事例をもとにお話しされた。



2. 木下貴裕先生（令和元年度卒）は，単元を貫く課題を設定した授業実践について発表した。対面での話し合いの活動ができない中でも確かな学びを得られるように取り組んだとする報告があった。発表後，回答が困難な生徒に対するアプローチの仕方についての質問には，マンツーマンでの支援，班で得意な生徒に見てもらうなどの対応をしているという返答があった。



3. 上田友哉先生（令和元年度卒）は，ICTを活用したコロナ禍での授業実践について発表した。ICT活用によってグループワークや予想問題の共有を行い，「対話」による学びを確保したことなどの報告があった。質疑では，ICTに慣れていないために活動できず授業が終わってしまうことが課題であり，新しいやり方への転換について考えたいという意見が出された。

<感想>

栗原先生のご講話では，「見方・考え方」が生徒の経験によって変わるため，教員としてどのようなアプローチができるかは教材研究にかかっていると感じた。生徒の「見方・考え方」を生かし，正しい方向へ導ける教員になりたい。「素朴理論」の話から，教員は科学的知識・理論を背景に，子どもたちが追究したい内容にすることが重要だと分かった。卒業生の発表では授業づくりの重要な部分や見えにくいコロナ禍の実態が分かった。

（記録者：加藤 友夏，佐藤 貴啓，庄司 一稀）

「深い学び」を実現する公民的分野の授業 —社会的事象に対する素朴な理解を踏まえて—

栗原 久 教授（東洋大学文学部）

1. 子供の素朴な見方・考え方を探る

子供たちは白紙の状態に授業に臨んでいるわけではなく、自身の生活経験を通して生み出した独自の見方・考え方（素朴理論）の影響下で学習しています。素朴理論は間違っていることがありますが、それなりに一貫した説明力・予測力をもつ「理論」です。

大人でも、子供の時に構築した素朴理論を持ち続けています。すなわち、授業で教わったくらいでは、素朴理論は科学理論に置き換わらないことがあるのです。

今回の学習指導要領改訂では、「主体的・対話的で深い学びの実現」が求められています。しかし、素朴理論に囚われたまま「主体的・対話的」な学習をしたところで「深い学び」が実現するとは限りません。「深い学び」の実現には、子供たちがどんな素朴理論を保持して授業に参加しているのかを理解し、社会で汎用的に使える概念等に関わる知識を獲得させる授業を「設計」する必要があります。具体的には、①.社会的事象に対する子供たちの考え方を調べる、②.子供たちに議論させ、素朴理論の有効性を一旦強く意識させる、③.葛藤教材を提示することで、素朴理論の限界や矛盾を理解させる、④.より説明力の高い「新しい見方・考え方」の存在を示唆することで気づきを促す、という過程が想定されます。

2. 見方や考え方を働かせる学習の充実

授業を通じて素朴理論を置き換える「新しい見方・考え方」に関して、「中学校学習指導要領解説 社会編」は、「社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の『視点や方法（考え方）』を「社会的な見方・考え方」と説明しています。公民的分野では、4つの内容項目に応じて、「対立と合意、効率と公正」、「分業と交換、希少性」、「個人の尊重と法の支配、民主主義」、「協調、持続可能性」といった諸概念を用いて、課題を追究したり解決したりする学び方が要求されるのです。しかし、「見方・考え方」を「社会的事象を読み解くときの概念的枠組み」と捉えても、社会的事象に関わる「見方・考え方」は複数あること、その中のどれがもっとも確からしいのか判断するのは一般に困難なこと、異なる「見方・考え方」からは異なる主張が可能であることなどに留意しなければなりません。

3. 全体のまとめとして

公民の授業は、①用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識の習得、②社会的事象に対し「なぜ」と問い、「なぜならば……」と答える説明、③社会的な諸課題を解決するための、各自の合理的な意思決定（選択・判断）、④社会的な諸課題を解決するための、他者との対話を通じた合意形成、⑤社会的な諸課題を解決するための提案・陳情・ボランティアといった社会参画、という5つの能力の養成を目指します。

理科の授業のベースに物理学や化学といった自然科学があるのと同様、社会科の授業のベースには政治学や経済学などの社会科学があります。社会科の授業は、現代の社会諸科学の研究成果による裏付けのもと、深い教養を有する教師による、生徒の経験や心身の発達に応じて内容が構成・配列された計画・指導のもとで行われる必要があるのです。

科学とは「なぜ」を問う。だから、公民の授業は「なぜ」と問いを立て、追究するものであってほしいと思います。生徒の「わかった!」を支援する授業を行っていきましょう。

（文責：教育フォーラム 2021 実行委員・第4分科会担当）

単元を貫く課題を設定した授業実践 ～第3学年公民的分野「生産と労働」～

木下 貴裕（埼玉県・寄居町立寄居中学校・令和元年度卒）

1. 実践の背景

本実践は、昨年度初任1年目に行ったものである。所属校である寄居中学校で昨年度は三学年の担当をさせていただいた。新型コロナウイルスの感染拡大もあり、4・5月は全校が休校になるなど、とにかくイレギュラーが多かった一年であったと感じる。授業では、新型コロナウイルスの影響もあり、話し合い活動をする事さえできなかった時期もあった。そんな中でも、生徒たちが確かな学びを得ることができるように試行錯誤をしながら授業に臨んだ。

公民分野に入ってから授業に取り入れたのが、「単元を貫く課題」である。同一の学習課題を問い続けるという問題解決的な学習の展開を意図的・計画的に行うことを目的としている。公民的分野の特に経済分野は、苦手としている生徒が多く、初めから必要以上に難しい印象を抱いている生徒が多いと感じた。そこで、授業の中で何を学べば良いのかを明確にし、さらに学びの取っ掛かりにしてほしいと思い、本単元ではレジュメのような課題を設定した。

2. 実践の方法・内容

単元名 生産と労働(7時間扱い)

- ①単元の導入
- ②資本主義経済と企業
- ③株式会社の仕組みと企業の社会的責任
- ④労働の意義と労働者の権利
- ⑤株主になろう(前半)
- ⑥株主になろう(後半)
- ⑦単元のまとめ

3. 考 察

本実践を行ってみて、改めて単元を見通して指導することの重要性が分かった。また、「単元を貫く学習課題」に対する単元前の学習者のワークシートへの記述は、学習者のレディネスを把握する診断的評価の手段として機能させることができた。また、単元の初めに資料を提示することで、何を学ぶ必要があるのか、課題に解答するために、何が必要なのかを考えさせることができたのはよかったと感じる。

その一方で、課題に対して解答するのが困難な生徒に対しての支援が大変苦しかったように感じた。今後の課題として、そのような生徒に対する支援策を模索していき、自己研鑽に励みたい。

ICTを活用して、どのように学びを確保していくか

上田 友哉（神奈川県立大和南高等学校・令和元年度卒）

1. 実践の背景

新任2年目で、勤務校は神奈川の県立高校である。昨年度、今年度ともに新型コロナウイルス感染拡大防止のため、分散登校や短縮授業、オンライン授業、授業内での対面によるグループ活動の禁止など、様々な影響を受けてきた。そのような状況の中で、生徒同士が積極的に自らの考えなどを共有し、より考えを深めるような活動を従来通り行うことは容易ではない。

しかし、神奈川の県立高校では、生徒に一人ひとつの Google アカウントを作成しており、Google Classroom をはじめとする様々な Google アプリを利用することが可能であり ICT の活用を進めるといふ点では環境は整備されている。それらを活用することにより、コロナ渦においても、“対話的”な学びを確保し、様々な視点から考えを深めさせる活動を行うことができるだろうと考えた。

また、私の勤務校では、今年度の夏頃から全ての HR 教室にモニターが設置され、それを活用して、授業中に生徒がオンライン上で作成した成果物も、クラスですぐに共有することもできる。

2. 実践の方法・内容

(1) PowerPoint と Google Meet の画面共有機能を活用したオンライン授業

⇒授業プリントは事前に配布し、PowerPoint に板書する内容を用意しておき、画面共有機能を使って、生徒が自宅にいても自分の端末で授業を受けられるようにした。

(2) Google Chat と Google Jamboard を活用した対面しないグループワーク

⇒生徒同士が直接向き合ってグループワークを行うことができないため、Google Chat を使い、コロナ渦でも”対話的”な活動を確保できるようにした。

(3) Google Form と Kahoot というサイトを活用した試験予想問題の共有

⇒定期試験前に、Google Form を使って、それぞれが考えた試験の予想問題を収集し、Kahoot というサイトを使い、オンラインクイズ大会のような形で共有した。

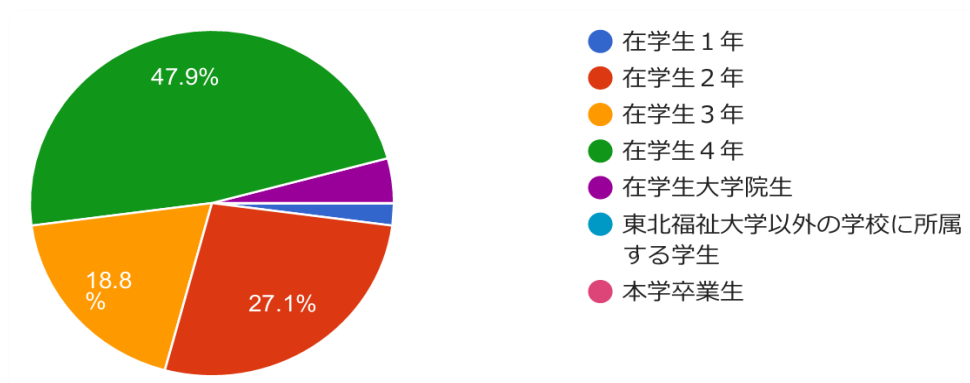
3. 考 察

○ICT を活用した、自らの考えなどの共有

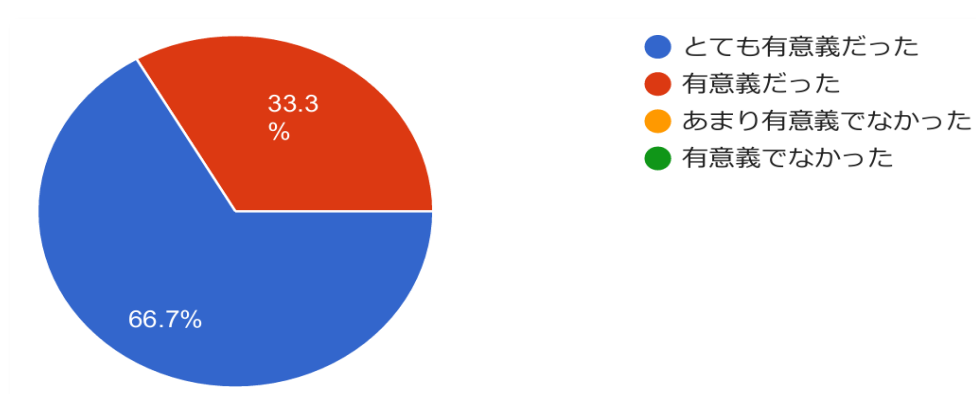
対面授業ができない中、一方的な講義型の授業が多くなってしまうが、ICT を活用することにより、対面しない前提でもそれぞれの考えなどを他の生徒と共有することが可能であると分かった。実際には教室の中で実践したものではあるが、それぞれのアプリやサイト等を活用することにより、登校することが難しい状況でも、“対話的”な学びを確保することはある程度できると考える。

<第4分科会 アンケート結果>

1 現在の所属、職業などについて（48 件の回答）



2 内容（講話と発表）について（48件の回答）

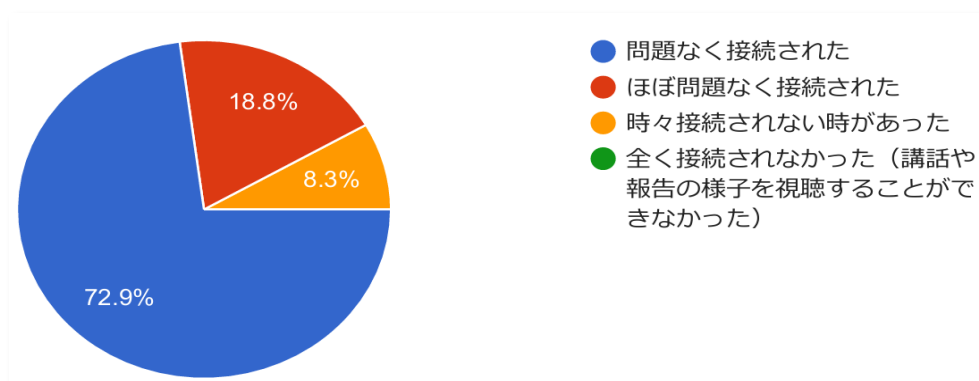


<ご意見>

- ・ 公民科の指導にあたって、質問を含め提示の方法を伺うことができたのは良い機会であった。
- ・ 実践報告で教員になる前に初めて学ぶことが多かった。
- ・ 授業の実例で公民的分野についてはあまり聞く機会がなかったため、とても有意義であると感じた。
- ・ 来年から教諭として教壇に立つにあたって、指導観や子供たちの目線の大切さなど、再確認することができた。
- ・ 公民の授業については、単元を貫く課題や生徒の興味関心、卒業後の生活にも生きるような活動について知ることができた。
- ・ 実践報告は、具体的なイメージをつかみながら話を聞くことができて良かった。

- ・子どもたちにどのようなことを考えさせればよいのか、どのような考えをもって生徒と向き合っているのかが非常に勉強になった。
- ・子どもの見方・考え方についてきちんと考えていくよい機会となった。
- ・生徒への働きかけについて聞くことができたため有意義であった。
- ・自分の指導観などあいまいな部分を明確にすることができた。
- ・事例に基づいて、どのような指導をしていくべきかについて知ることができた。
- ・講演では現代の教育に繋がる貴重なお話を聞けたことで、私自身の考えが更に広まった。また、実際の現場の先生方による実践のお話を聞くことで、自分が教員になった際に意識すべきことを学んだ。
- ・今回は公民の分野でのフォーラムだったが、地理や歴史の分野での開催も希望する。
- ・ICTの話や単元を貫く課題など、とても具体的で有意義だった。

3 オンライン実施について（48 件の回答）



〈ご意見〉

- ・遠方である等の事由がある場合に大変便利であると感じた。
- ・場所が限定されなかったので良かったです。
- ・オンラインでも支障なくできたと思うので、継続して欲しい。
- ・オンライン開催だと移動とかに時間を割くことなく、自宅で受けることができるのでとても良いと思う。
- ・オンラインでの開催でしたが、接続不良等もなくスムーズに視聴でき、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。
- ・メモやスライドを記録に残せる点でオンラインの講義、報告はとてもよかった。
- ・対面の方が講師の皆さんの熱意がより伝わってきたのかなと思うと残念でした。

第5分科会（特別支援教育）

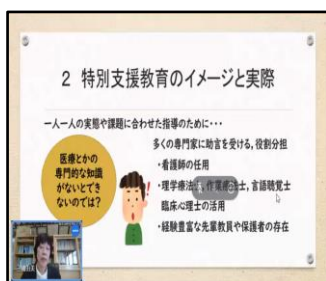
<第5分科会 記録>

司会：鈴木 雅弥，柏原 力樹

参加者：卒業生：10名，一般：8名，在学生：77名，本学教員：14名

計109名

第5分科会では宮城県立石巻支援学校校長 三浦 由美先生による講話と2名の卒業生の発表があった。



1. 三浦由美校長先生から「コロナ影響化の学校現場の対応と特別支援学校教員を目指す学生に必要な力」と題してご講話いただいた。三浦先生は「特別支援教育を志すみなさんに期待すること」について、特別支援教育を身近に感じ興味を持ってほしいという思いから、石巻支援学校の実際、コロナ禍における学習の工夫等を取り上げられた。ご講話の最後には、三浦先生が大切にされている「特別支援教育はその子にぴったりのプレゼントをすること」という言葉を教えていただいた。



2. 佐藤奈々先生（平成30年度卒）は、「特別支援学校小学部での取り組み」と題して、特別支援学校教諭を目指す学生に向けて、児童が生き生きとした生活を送ることを目指した実践について発表した。発表の最後には、佐藤先生が担任するクラスの様子について紹介した。児童の実態を踏まえ、生き生きと楽しく学習活動に参加できるような授業を設定することの重要性について説き、特別支援学校の魅力が伝わっていたら大変うれしいと語った。



3. 網塚ゆり夏先生（令和元年度卒）は、「特別支援学校に在籍する児童の行動理解と支援」と題して、無発語の児童を対象に、噛む・ひっかく等の問題行動がなぜ生じるのか、またそれらの行動を減らすにはどのような方法が有効か検討・実践した内容を発表した。児童生徒の不適切な行動を減らすためには、機能分析を行い、行動の意味を推定し、そのうえで機能に応じた新たなコミュニケーションの指導を行うことが必要だと報告した。

<感想>

三浦先生のご講話と2名の卒業生の発表から、特別支援学校の実際や特別支援学校教員の実践を学ぶことができた。また、質疑応答ではコロナ禍における学校での具体的な手立てや子供が問題行動を起こした時の対応など、先生方の具体的な実践を聞くことができた。

（記録者：丹野 悠莉，小西 美雨，宮澤 夢歩）

特別支援教育を志すみなさんに期待すること ～コロナ禍の特別支援学校での実践の紹介を含めて～

三浦由美 校長（宮城県立石巻支援学校）

1. 宮城県立石巻支援学校の紹介

石巻支援学校は宮城県内に19校ある知的障害特別支援学校のうちのひとつで、小学部、中学部、高等部の3学部から編成されています。全校生徒は139名であり、約半数が高等部の生徒です。教職員は105名おり、9名の看護師が医療的ケアを必要とする11名の児童生徒に対応しています。

2. 特別支援教育のイメージと実際

学生にとって、特別支援教育は「専門的な知識が必要で難しそう」というイメージを持たれる場合も多いと思われますが、特別支援教育は学校の教師だけで取り組むものではなく、多職種の専門家と連携し、それぞれの専門的知識を活用することが大事です。実際に石巻支援学校でも看護師や理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士と連携し、専門的立場からの助言を参考にしながら実践を進めています。

特別支援教育は、一人ひとりに合わせた指導を行うことにその面白さがあります。知的障害教育においては、各教科等を合わせた指導である生活単元学習や作業学習を行うことができ、さまざまな教科の内容を取り入れて、子ども達のニーズに合った学習を組み立てることができます。教師一人ひとりの得意分野を生かした指導ができることも醍醐味です。

3. コロナ禍での学習の工夫

児童生徒の中にはマスクをすることが難しく、接触回避が難しい授業も多いため、換気や消毒の徹底を心掛けています。先生方や保護者の努力によって多くの児童生徒がマスクを着用できるようになりました。給食指導では、児童生徒が好きな曲をリクエストしてその音楽を聴きながら食事するなど、会話に代わる楽しい雰囲気づくりを心掛けた実践もありました。校内実習のための委託作業もコロナ禍で減少しましたが、図書室の本の一覧表をパソコンで作成するなど、校内でできる作業学習の工夫を行いました。小学部では校外学習に代わる企画として学校縁日を2週間にわたって実施し、児童が持参した小遣いで駄菓子などの好きなものを買う学習などを行いました。

4. 全ての教師が行う特別支援教育を進めるために

障害の有無によらず全ての子ども達のニーズに応じた適切な教育を展開することが求められています。つまり、小中学校や高等学校においても全ての教師が特別支援教育を行っていくこととなります。そのためにも、子どもたち一人一人をしっかりと知ること、子どもの強みを生かすこと、子どものできることを引き出す手立てを考えることが大切であり、そのための発想力、想像力が教師に求められます。

（文責：教育フォーラム2021実行委員・第5分科会担当）

特別支援学校小学部での取り組み
～ 各教科等を合わせた指導について ～
 佐藤 奈々（宮城県立角田支援学校・平成30年度卒）

1. 実践の背景

宮城県の小学校教諭（特別支援学校卒）で採用され、角田支援学校での勤務3年間が経過しようとしている。本校は知的障害種の特別支援学校であり、自閉症やダウン症などの複数の障害種を併せ有している児童生徒も多い。今回は、小学部低学年から高学年の児童の様子を踏まえながら、各教科等を合わせた指導の実践を紹介する。

2. 実践の方法・内容

<これまでの所属クラスと紹介する各教科等を合わせた指導について>

採用から	所属	児童	教員	実践例	
1年目	小学部 1年生	4名	2名	(1) 自立活動	「自閉症児へのコミュニケーション」
2年目	小学部 2年生	7名	3名	(2) 遊びの指導	「みんなであそぼう～お話遊び～」
3年目	小学部 5. 6年生	5年生3名 6年生2名	3名	(3) 日常生活の指導	「朝の会」
				(4) 生活単元学習	「宿泊学習～あぶくま荘にとまろう～」

- (1) 小学部1年生Hとの出会い、教師も児童も“まねる”ことから
- (2) 小学部2年生7人に合った遊びの指導の目標を（研究授業で行った実践について）
- (3) 実態差の大きい複式学年のクラス、歌とボードでみんなが前を向くように
- (4) 児童4～6年生17名、教員11名で行く校外宿泊学習、事前学習で必要なこととは

3. 考 察

今回、知的障害のある児童が生き生きと活動するための授業の在り方について考察した。この発表を通して、特別支援学校の教員を目指す学生の皆さんに知的障害種の特別支援学校の魅力が伝わったら大変嬉しく思う。また、私自身も今後の教員生活を送る中で、児童の力になる実践を積んでいくことで、教師としての能力を高めていきたいと考える。

特別支援学校に在籍する児童の行動理解と支援

ー 行動の機能に着目したアプローチ ー

網塚 ゆり夏（宮城県立気仙沼支援学校・令和元年度卒）

1. 実践の背景

大学卒業後、宮城県で特別支援学校教員に採用されて2年が経った。所属校は、昭和59年に開設された。本校には小学部から高等部までの児童生徒が在籍しており小学部児童数は15名である。現在は小学部4学年3名の児童を教員2名で担任している。筆者はこの学級を前年度から担任してきた。学級内で、頻繁に噛む・ひっかく等の行動が見られた無発語の児童を対象に、これらの行動問題がなぜ生じるのか検討し、こうした行動を減らすための方法について検討した。

2. 実践の方法・内容

本研究を開始した今年度4月当初の対象児童は、噛むなどの行動上の問題が多く見られていた。このことから、児童の行動上の問題が起こらないよう、課題量の調整や、要求時に両手を重ねて2度たたき「ちょうだい」の機能をもつサイン言語の指導をしてきた。

また、児童の行動上の問題の機能を明らかにすること（平澤・藤原, 1995）を目的としたABC分析を行った。その結果、行動上の問題が多く見られた場面として休み時間が抽出された。休み時間のABC分析を見直すと、噛む・ひっかく等の行動の結果、タブレット端末や本等、対象児童が好きな物を得ている場面があることが分かった（事物獲得機能）。

そこで、「噛んだりひっかいたりしても好きなものを獲得できない」という経験を積むことよりも、「事物獲得」という行動の機能に着目して適切な要求行動を新たに学習し、その結果欲しいものを得られるという経験を積むことが必要だと考えた。指導目標として、カードを教員に渡して欲しいものを要求する行動や、手差しで欲しいものを要求する行動の獲得をねらった指導プログラムを新たに作成した。指導場面としては、国語・算数・自立活動の課題時にカードや手差しで欲しいものを手に入れるというシステムのコミュニケーション指導を行った。

3. 考 察

（1）ABC分析

行動上の問題の検証には、ABC分析が有効であった。今回の研究でABC分析を行ったことにより、むしろ教師の側が行動上の問題を強めるような対応をとっていた場面があることが分かった。ABC分析に基づいて、不適切な行動を減らすだけでなく、教師のかかわりを見直し、児童の適切な行動を増やすための学習に取り組むことが大切であると考えられた。

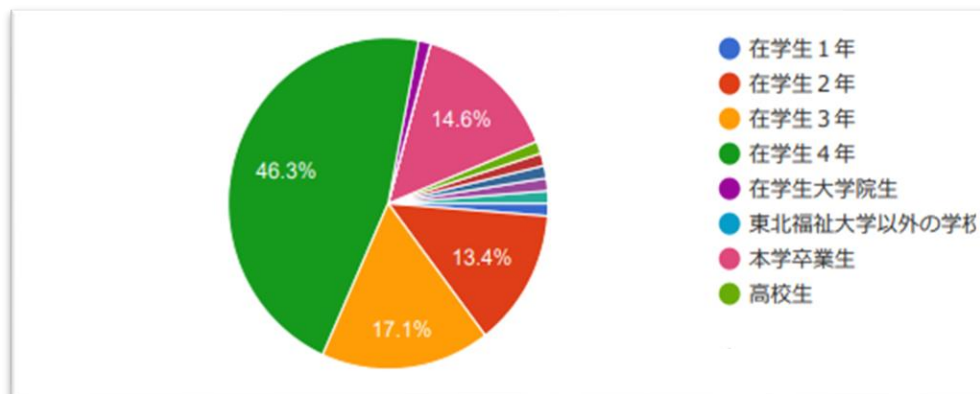
（2）要求行動の獲得

特別支援学校に在籍する重度知的障害児には音声言語でのコミュニケーションに困難をきたす児童生徒も少なくない。そのような児童生徒は自分の意思をうまく伝達することができずにストレスを抱え、その結果が行動上の問題となって現れことも多い（平澤・藤原, 1996）。音声言語を有さない本研究の対象児も、自分の思いをうまく伝えることができない場面が多くあると思われたことから、絵カードの利用や手差しといったノンバーバルな要求行動の獲得に力を入れて指導をした。今回の指導結果から、コミュニケーションスキルの獲得が行動上の問題の減少に大きく影響することが考えられた。

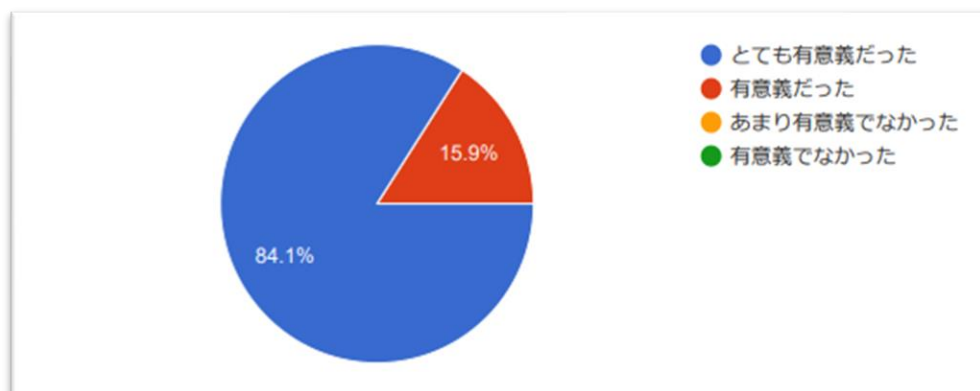
【文献】

平澤紀子・藤原義博（1995）発達地帯児の課題場面における問題行動への機能的コミュニケーション訓練：置換条件のもつ伝達性の検討. 特殊教育学研究 33(2),11-19.

1 現在の所属、職業等について



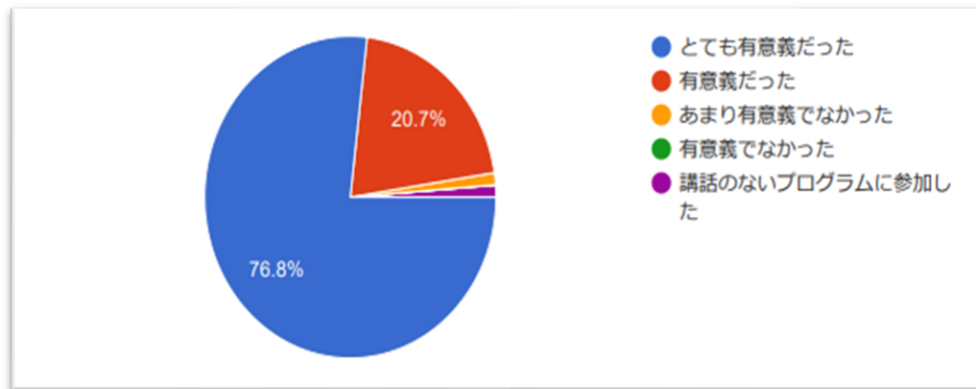
2 卒業生の実践報告・話題提供の内容について



<ご意見>

- ・実践的な学びを多く得ることができた
- ・先生方の実践を聞くことができ、とてもよかった。現場での指導の際に取り入れていきたい内容が多くあり、今後の指導を改めて考える良い機会となった。
- ・実際の実践の場面を見ることができてイメージがしやすかったです。視覚的な支援方法であったり、機能分析の方法であったり、様々な手立てでアプローチすることができるなど感じました。
- ・卒業生のお話を聞けて特別支援学校の実態やどのような活動を行っているかということが分かったのが良かった。
- ・実際の現場で活躍されている先生の実践的なお話を聞くことができたのは、とても良かったと思います。いろいろな面から、特別支援教育の実際を知ることができました。
- ・専門的な理論に則った発表で大変参考になりました。

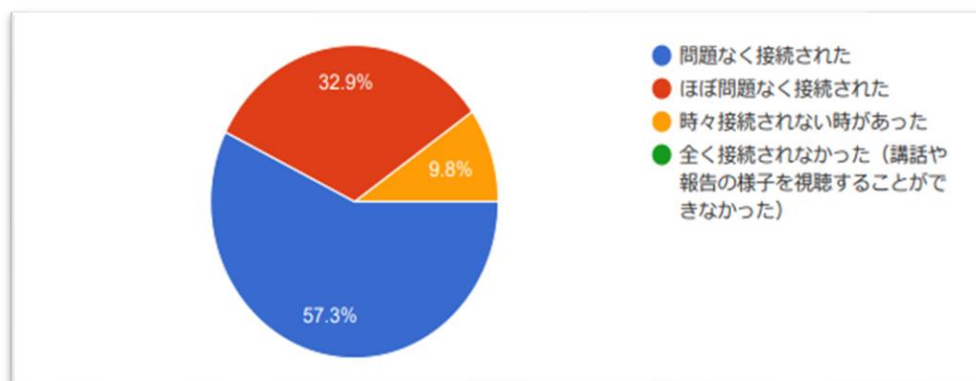
3 講話について



〈ご意見〉

- ・教員に必要な心構えなどを知ることができた。
- ・現場にいて「確かにそうだな」と思う内容が多くあり、改めて指導や児童とのかかわり方について考えることができた。
- ・コロナ禍の学習の工夫やこれからの教員生活で行かされる内容で、とてもためになった。
- ・講話は実習でしか聞く機会がなく、管理職としてお仕事されている先生方の信念や教育に対する気持ちを知ることがとても勉強になると感じているため、今回も大変有意義で貴重なお話を聞けたと思っています。
- ・様々な情報を知ることができた。
- ・特別支援学校の魅力を知ることができた。
- ・コロナ禍の非日常でも、様々な学習スタイルを作り上げていることに感銘を受けました。

4 オンライン実施について



〈ご意見〉

- ・オンラインの開催でしたが、段取りよく進んでおり、とても有意義な時間になりました。
- ・実際に対面で行えたらもっと良かったと思いましたが、進行や発表の方の熱心な思いが伝わり良かったです。
- ・YouTube 配信と双方向を使い分けたのは、接続のトラブルもなく良かったと思います。
- ・パワーポイントの資料を見ながら話を聞くことができて良かった
- ・時々回線が悪くなり、飛んでしまう場面がありました。

オンライン開催ならではの充実した内容を目指して

「TFU 教育フォーラム 2021」実行委員長

渡 会 純 一

今年度 TFU 教育フォーラムは 10 回目を迎えました。当日は、オンライン開催で 655 名、北は北海道から南は福岡県まで、全国からの参加者にお集まりいただき、盛会のうちに終了しました。ご参加いただきました皆様、ありがとうございました。

「TFU 教育フォーラム 2021」を次の 4 つの観点から総括しました。

1. 大会テーマ設定の意図

2021 年 5 月、実行委員による本格的な話し合いが始まりました。当時は緊急事態宣言が出されている地域もある状況の中でしたが、あえて未来志向を目指し、大会テーマを「ポストコロナへの志向—すべての子どもの確かな学びを目指して—」としました。また、「すべての子ども」という点を強調し、次の 2 点の合理的配慮を行うこととしました。

- ① 教育フォーラム開催前に発表原稿資料をホームページに提示する。
- ② オンライン発表の際には可能な限り「字幕」を提示する。

前年度はコロナ禍により中止をせざるを得なかった経緯を踏まえ、さらにこれまでのオンライン講義や学会等の経験を活かし、「オンラインだからこそ気軽に参加でき、学びにつながる大会にしよう」と誓い、さまざまな準備を重ねていくことになりました。

2. オンライン開催を支えた準備

従来と違うコロナ禍の最中に行う教育フォーラムとして次の準備を行いました。

- ① ホームページにも細かな情報をアップできるよう、告知用オープンのページを作成し、具体的な発表者やタイトルの情報まで事前に確認できるようにしました
- ② 参加者限定のクローズのページも用意し、そこから双方向通信に入れるようにしました。そして、こちらにレジメを PDF で提示し、申込者は事前に閲覧できるようにしました。また、終了後も大会の様子を視聴できるように情報提供しました。
- ③ PR 課に全面協力を依頼し、オンラインでの通信が途切れないように、また双方向通信（原則 Google Meet）がうまく使えるようにしました。
- ④ オンライン接続を確実にするため事前の接続試験日を 1 週間前に設定しました。また、発表者向けに「発表者マニュアル」を作成し、接続試験のときにマニュアル通り画面に掲示できるかを試しました。今回の画面は、Meet の画面、発表用のレジメ、字幕掲出のサイトの 3 種類を同時に画面に提示するを行いました。
- ⑤ 宣伝媒体をチラシとし、より多くの団体等に配布することができ、きめ細やかな宣伝活動を行いました。

3. TFU 教育フォーラム 2021 の成果

発表者および講話の先生方には、掲げたテーマに沿った内容をお話していただきました。ポストコロナへの志向として、次の具体的方策が報告されました。

- ① 子どもに前向きに寄り添う
- ② 具体的な手立てを考える
- ③ ICT の積極的活用
- ④ 遠隔授業の活用
- ⑤ 信頼関係の構築
- ⑥ 見方・考え方を働かせる

どの発表も、実践者の熱量を感じられるもので、コロナ禍の中でも、またポストコロナでも活用できる「充実した学校教育（保育）の実践」についてまとめられていました。

また、アンケートには、「本校で学んだ卒業生の活躍や学びを生かした実践を展開していることが分かり、今後の自分のビジョンの参考になった」などのご意見がありました。また、一般の先生方からも「若い先生方が頑張っている姿が見られてよかった。職場でもどんどん支援していきたい」というコメントもいただきました。

さらに、合理的配慮として実施した手立てについてもアンケートには「全ての資料を配布して頂けたため、終わったあとも細かく勉強しようと思います。」「字幕をつけていただき、ありがたかったです。」という記載が複数見られたことから、当初計画していた全ての方々に対して「情報の質保証」は担保できたものと考えます。こうしたことから本教育フォーラムは、学生と学校現場教員とをつなぐ役目を果たしていることを改めて実感しました。

4. 今後へ向けて

（１）人との「つながり」

今回の大会を実施するにあたり、様々な仕事を大学内部署および教員の協力を得ました。多少無理なお願いを申し上げたこともあったことと思いますが、それでも実現できたのは、大学学部内の教員、また各職員に対して常日頃から様々な関わりを持ったこと、すなわち人との「つながり」があったからこそ実現できたものと考えます。この「つながり」は、第１回教育フォーラム（2012年）のサブテーマにもあった言葉です。意味としては成長のつながりから横のつながりに変化していますが、最終的にはどのような状況でも、人との「つながり」を大切にしていくことが根幹になると考えます。

（２）全国からの参加が可能にしたオンライン開催

本来であれば本学卒業生にも来学していただき、久しぶりの東北福祉大学を味わっていただきたかったところでしたが、県外で働いている教員から「オンライン開催であったことで他県に行かなくとも、様々な先生方の話を聞くことができたのでとても良かったです。」というご意見をいただきました。

今年度の開催を活かして、今後は、オンラインも踏まえた運営ができる「ハイブリッド型」が望ましいのではないかと思います。リカレント教育という観点で見ても、卒業生がもっと多く参加できるような働きかけができると、なお良いと思います。

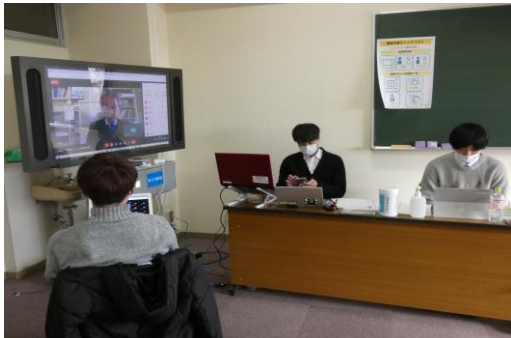
また来年度、良き形で学び合えることを楽しみにしたいと思います。

TFU 教育フォーラム 2021」 学生実行委員名簿

No.	氏 名	ゼミ	業務内容	その他の業務	担当教員
1	佐々木萌子	渡会	<u>学生実行委員長</u>	開会行事司会（兼務）	富樫
2	新沼 耕太	辻	<u>学生副実行委員長</u>	開会行事司会（兼務）	〃
3	小畑 友哉	安藤	Web サポート		山下
4	佐々木翔琉	山下	〃	（以上7名は本部にて	< 協力 >
5	佐藤 公紀	庭野	〃	待機し、開会会場	大学 PR 課
6	成田 優文	伊勢	〃	（本部）設営・撤去を	職員
7	木村 真子	中林	〃	行う）	
8	高橋 菜央	山崎	第1分科会 司会	第1分科会 司会進行	河合・利根川
9	千坂 妙恵	利根川	〃	〃	山崎・和田
10	大江 祐奈	河合	第1分科会 記録	第1分科会 記録	三浦・青木
11	佐藤 玲	和田	〃	〃	
12	末永あかり	青木	〃	〃	
13	阿部紗梨夏	高野亜	〃	〃	
14	柴橋 宗汰	今野	第2分科会 司会	第2分科会 司会進行	今野・加藤
15	鈴木 里桜	上條	〃	〃	上條
16	浅野真衣子	駒野	第2分科会 記録	第2分科会 記録	三浦・佐藤郷
17	大河内美穂	石原	〃	〃	
18	高橋 萌	熊谷	〃	〃	
19	阿部 桃奈	三浦	第3分科会 司会	第3分科会 司会進行	水野・熊谷
20	遠藤 隼毅	菅原	〃	〃	〃
21	及川 麻帆	加藤	第3分科会 記録	第3分科会 記録	三浦・伊勢
22	佐藤 育美	白井	〃	〃	
23	三浦 風香	水野	〃	〃	
24	渡邊 祐万	佐藤郷	〃	〃	
25	阿部 竜大	下山	第4分科会 司会	第4分科会 司会進行	高橋久・浅川
26	大倉日菜子	門脇	〃	〃	門脇・佐藤恵
27	加藤 友夏	星山	第4分科会 記録	第4分科会 記録	下山
28	佐藤 貴裕	浅川	〃	〃	三浦・鍛代
29	庄司 一稀	朝倉	〃	〃	
30	鈴木 雅弥	和	第5分科会 司会	第5分科会 司会進行	和・大西
31	柏原 力樹	大西	〃	〃	高屋・杉浦
32	小西 美雨	茂木	第5分科会 記録	第5分科会 記録	辻・村上
33	丹野 悠莉	高屋	〃	〃	三浦・黄
34	宮澤 夢歩	黄	〃	〃	

<教育フォーラム 2021 舞台裏>

本教育フォーラムは、各ゼミ代表者から選出された学生実行委員によって多くの係を分担し運営されました。司会や記録担当の学生たちは、感染症対策のため自宅等から遠隔で作業を遂行しました。一方、写真に示す通り大学の本部会場でオンライン開催を支えた学生たちもいました。「教育フォーラムを成功させよう！」とそれぞれの持ち場で熱意を持って取り組みました。



役務分掌（教員）概要

役割	担当	主な分掌内容
大会委員長	寺下	総括
A 総務局	〔実行委員長〕 渡会 石原・熊谷・朝倉・水野・和田・下山・辻・山崎・白井	全体調整，運営計画全般
B 事務局	〔副実行委員長〕 富樫 河合・富樫・今野・和・渡会 山下・齋藤・畠山 〔案内状手続き発送〕 熊谷・辻・菅原	後援名義申請，連絡他 ポスター・依頼状作成他 アンケート作成 案内状手続き
C 会計部	高屋・鈴木・中林・駒野・梶原・清宮・庭野	予算案，会計報告他
D 広報部	三浦・安藤・佐藤郷・浅川・茂木 〔分科会記録〕 青木・佐藤郷・伊勢・鍛代・黄 〔開会行事記録〕 安藤・久保田	報告書作成 分科会資料まとめ他 写真記録
E 企画部	〔幼保〕 河合〔小〕 今野〔中高〕 高橋久 〔特支〕 和 〔学生実行委員会指導〕 茂木・富樫・星山	各分科会の内容計画立案 Meet URL 発行他 学生指導
F 当日運営	教員全員 〔検温〕 伊勢・佐藤郷 〔出席状況確認〕 白井・高橋加	分科会運営，web サポート
学内協力	PR 課職員	web サポート

TFU 教育フォーラムのあゆみ

実施月日/参加者数/特記事項	大会テーマ・主な内容等
子ども教育フォーラム 2012 8 月 18 日, 参加者: 300 名 卒業生のリカレント教育 として教育フォーラムを 開始	テーマ: つながりのある保育・教育を求めて 第 1 部: 基調講演 「教材でつながる, 教材をつなげる」 東北福祉大学 西林克彦教授 「保幼小連携の枠組み - 実際と展開 -」 神戸大学大学院 北野幸子准教授 第 2 部: ワークショップ「ワールドカフェ in TFU」 担当者: 三浦和美 (子ども教育学科・教職)
TFU 子ども教育リカレント 講座 2013 10 月 19 日, 参加者: 150 名 分科会形式の運営を開始	第 1 部: 記念講演 「考えてみよう 眠りのこと ～どんな時に眠くて, どん な時に眠くない?～」 東北福祉大学 水野康准教授 第 2 部: 分科会 (保育対象・教職課程) 担当者: 小石川秀一 (子ども教育学科・教職)
TFU 教育フォーラム 2014 10 月 11 日, 参加者: 155 名	第 1 部: 記念講演 「算数のたのしさ」 東北福祉大学 石原直教授 第 2 部: 分科会 (保育対象・教職課程) 担当者: 土生昭文 (子ども教育学科・教職)
2015 年 4 月 教育学部教育学科・大学院教育学研究科発足により共催実施	
TFU 教育フォーラム 2015 10 月 3 日, 参加者: 800 名 初めて中央講師迎え開催 学科と大学院共催を開始	第 1 部: 記念講演 「子どもも大人も居心地の良い学校, 家庭, 地域社会をめ ざして」 教育評論家・法政大学教授 尾木直樹先生 第 2 部: 分科会 (保育対象・教職課程) 担当者: 熊谷和彦 (初等教育専攻・小学校)
TFU 教育フォーラム 2016 11 月 6 日, 参加者: 390 名	第 1 部: 講演 「特別支援教育の動向」 東北福祉大学 大西孝志教授 第 2 部: 分科会 (保育対象・教職課程) 担当者: 熊谷和彦 (初等教育専攻・小学校)
TFU 教育フォーラム 2017 10 月 14 日, 参加者: 100 名	第 1 部: 講演 「空がこんなに青いとは わたしの初人験」 東北福祉大学 土生昭文准教授 第 2 部: 分科会 (保育対象・教職課程) 担当者: 熊谷和彦 (初等教育専攻・小学校)
TFU 教育フォーラム 2018 12 月 8 日, 幼保: 323 名	大会テーマ: 主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの 学びをどう幅広く支援するか

10月6日，教職：174名	大会テーマを設定し各分科会を実施。 中等部会新設。 担当者：今野和賀子（初等教育専攻・小学校）
TFU 教育フォーラム 2019 12月14日，幼保：427名	大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの学びをどう幅広く支援するか 10月12日，教職：台風19号により中止 担当者：浅川俊夫（中等教育専攻・社会）
TFU 教育フォーラム 2020 11月28日	大会テーマ：主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの学びをどう幅広く支援するか 新型コロナウイルス感染症拡大により中止 担当者：高屋隆男（特別支援教育）
TFU 教育フォーラム 2021 12月4日，参加者：655名 感染症対策のためオンライン開催	大会テーマ：ポストコロナへの志向 ーすべての子どもの確かな学びを目指してー 5分科会（幼保・小A・小B・中・特別支援）で開催 担当者：渡会純一（初等教育専攻・小学校）

編集後記

2020 年年頭より急速な感染症拡大となり、先行きの見えない日々が続きました。これまでに経験のない対応が求められ、多くの教育現場は混乱を極めました。

2012 年から続く「TFU 教育フォーラム」開催を検討する時期にもこの感染症拡大は大きく影を落としました。この時期に教育フォーラムを開催したらよいのか、開催するとしたらどのような方法がよいのか、課題は山積していました。しかし、実行委員を中心に大会テーマ「ポストコロナへの志向～すべての子どもの確かな学びを目指して～」が打ち出され、初めてのオンラインによる教育フォーラム開催に取り組むこととなりました。

全国各地からオンラインで参加した卒業生からは、積極的に ICT 機器やデジタルコンテンツ等を授業に取り入れながらも、目の前にいる児童生徒との関わりを大切にした実践が報告されました。オンライン上においても熱心に討議が展開され、新しい様式でのフォーラム開催の意義を実感することとなりました。また、記録集として分科会毎の発表や交流の様子をまとめることで、ポストコロナへの方向性をともに確認し、次への一步を歩み出すことができるものと考えます。

本教育フォーラム開催に当たりましてご協力いただきました講師の先生方、関係各位に心より感謝申し上げます。

なお、本報告書は、東北福祉大学教育学科ホームページにも PDF として掲載しておりますので、是非ご活用いただければ幸いです。

記録集総括：三浦 和美

「TFU 教育フォーラム 2021」記録集

2022 年 1 月 20 日発行

東北福祉大学教育学部/東北福祉大学大学院教育学研究科

